ミシンはマークで
お選び下さい

*HZD－956*型
ダイカスト・フルオートジグザグ

東京重機工業株式会社
本社工場　東京都調布市国領町８丁目２番地ノ１電話（480）1111番（大代表）

"ミュンヘン"への道

ヨーロッパに遠征していた選手団は多くの成果をもって帰国した。ルーマニアの合宿もさることながら、タシマイダンへの参加は一時にタイプの異った多くの相手と当ることができ、また選手権のかかっている試合の厳しさを身をもって感じとることができ、大変に有用だったと選手たちも語っている。

また、毎年ヨーロッパに遠征することも必要だとも云っている。これは単にハンドボールだけでなく、他の球技にも一般的に云われていることである。

しかしながら、ヨーロッパは遠い。費用も日数もかかり、相当の覚悟をしないと、毎年遠征というのはなかなか困難である

外国チームを国内に招待し、ヨーロッパの新知識を身につけると云う法も従来とられてきた

しかし、これにも問題はあった。東洋の国、日本への遠征というと、とかく遊びの気持が混じってくる。それに相手はかわるが、常に日本のチームはかわりばえのしないことも一因であった。

日本にとってみても、一種類のタイプのチームとしか試合ができないという難点がある。

それに真剣の度合が違う。またシーズン制などその他で考えなければない問題もあるが、やはり、気合をこめた実力同志でぶつかりあうのでなければ、招待する意味は半減しよう。

強化対策委では、三国対抗を行なったらとの意向をもらしている。これだと従来の欠点は大いに軽減することができよう。真剣味も一段と増そうし、また二つのタイプのチームに当ることができ、大いに強化に役だてることができよう。国内で三国対抗を行なえば、よその国同士の対戦というカードも組まれ、大変興味深い大会になろう。

問題は受け入れになる。三ケ国対抗というキャッチフレーズでどの程度ファンが集められるかにもかかってこようが、これが実現すれば日本のハンドボール界にとって、非常に大きな発展の機会になることは確かである。

ところで、強化対策委がこうした新しい構想を次々に打ち出す積極さは賞されていいと思う

せっかくの好企画が経済問題などで坐折してしまったり、規模が縮少されたりするのは残念だが、強化対策委の活動と全日本チームの動向には球界あげて暖い支援を送りたいと思う(藤本)

時　評

夏の全日本選手権大会が終っていよいよ秋のシーズンに入る。

ハンドボールの明け暮れに終っているとまったく月日の経つのが早い。あの大会がすぎたからもう秋だとか、そろそろこの大会だから冬が近いといった具合に季節が去来する。

ところで、年月の経過とともに大会の歩みや内容もはっきりと成長のあとを示している。しかし、いっそうの発展を望むならば現状にはいくつかの課題があると思う。チャンピオンへの道に関してここ数年大きな変化を示していないのもその一つだ

大会方式は多少異動がみられるが抜本的な改訂というのは極端にいうなら、どの大会もまったく行われていない。

例えばインター・ハイ。50をこえる参加校を考えれば勝ち抜き1本勝負という方法以外はとてもムリだろうが、クジ運によってかなり勝負の明暗が異ってくる。最強のチームを選ぶというならば、決勝以外に決勝はないハズだが"事実上の決勝戦"というものを時おり見ることがある。

2回戦に勝ち残った16校で改めてシード校(ランキング)を決め3回戦以降の抽せんを再度行う方法などを研究してみたらどうか。トーナメントの面白味がなくなるという声も出ようし16校に序列をつける是非も問題になろうがあえて提案してみたい。

全日本総合—特に男子については、そろそろ参加数の再検討をしたらどうか。全日本の最強者を32チームによる一本勝負で決めるのは"安易"だ。多少の低抗を覚悟で16チームにしぼってみてはどうだろう。

これによって本大会はもとより地域予選も充実する。大会期間を現行の5日間にすえおけば2回戦の勝者4強による決勝リーグ制が可能だ。16チームの内訳けは9ブロック代表のほか学連3、実連・教職連・関催県各1と前回優勝チームで満たす。

予選の段階で激烈なせりあいが予想されるところに意義があろう。

インターハイの代表に聞くと誰もが『県大会の決勝で勝った時がいちばん嬉しかった』という。代表になるための苦しい努力を物語っている。この厳しさを通ってこそチャンピオンを狙う資格があるのであり、全日本総合は、斯界最高峰の大会ながらその点甘いと思う。　(S)

「ハンドボール」9月号(第68号)目次

表紙写真＝全日本高校選手権準々決勝から。新居浜市商—高崎市女(右上)下関中央工—枚方(右下)中央大附属—佐世保北(左上)栃木女—室蘭商(左下)戦。

全日本男子（17名）国内試合出場へ

日本協会では7月28日東京で開いた臨時常務理事会の席上、全日本第2次候補選手（ルーマニア遠征メンバー）17名を7月29日以降所属チームに戻し、国内公式試合への出場を認めることに決めた。

これは、3月の全国理事会で国内試合出場規制の決定をしていたことに対する〝解除〟を意味するものである。

規制を解かれた17選手は次のとおり。

竹野、福本、井上、近藤、近森飯田、下里、東、平岡（以上大崎電気）、木野（ワクナガ薬品・全立教）、早川（ワクナガ薬品）、北井（埼玉教員ク・全教大）、野田（大同製鋼・全立教・全愛知）本田、藤中（以上日体大）、有永（立教大）、中井（同志社大）

全日本男子が公開練習

欧州遠征から帰国した全日本男子村田弘監督ら19人は8月1日午後2時から群馬県の富岡高グランドで、帰国報告会を兼ねた公開練習を行った。

全日本高校選手権の開催前日とあって、コートサイドは全国から集った高校選手や関係者で埋まりルーマニアにおける練習方法や、力と技をミックスさせた全日本チームのフォーメーションプレーが約1時間にわたって紹介された。

なお、公開練習会は8月14日全日本教職員選手権の開かれている埼玉県上尾体育館でも行われた。

信念のなさを露わす

日本協会がナショナルチーム（来春の世界選手権第2次候補）17人の国内試合出場規制を解いた。

もともとこの日本協会の規制決議（3月16日の全国理事会）には反対意見が多く、第一、選手を預る強化対策委がこの決定を全面的には支持していなかったのだ。

にもかかわらず日本協会は数度にわたる常務理事会（合議スタッフ）でこの問題の強行を申し合せて今日まで来たものである。

その点からすれば今回の解除の決定は大いに歓迎すべきなのだがそうとばかりは実はいえない。

私も、当初からこの問題には大反対で、愚策と極めつけていたのだが、急に日本協会が態度を変えたのは「どういう風の吹きまわしか……」といぶかしく思う。むしろ新たな問題を生んだともいえるのではないか。巷間の反対意見に対決するぐらいの気骨を示すかとみていたのだが、それも出来ず、一歩退いたのは、完全に合議スタッフの敗北と断言したい。

理事の一部にも「全国理事会の決定ということで、強引にここまで来ながら急に方向を変えた合議スタッフの態度はおかしい」という批判がおきている。

首尾一貫、長期的な計画力の乏しさは日本協会の大きな欠陥である。

今回の一事も自らの施政に説得力のないことを暴露し信念のない姿勢をさらけ出したしゆう態といえ合議スタッフの反省を促したい

残念なのは、3月16日の全国理事会をふくみ今日までの常務理事会で、なぜ今回のような誰が聞いても肯ける〝結論〟を導き出せなかったかということだ。

そうすれば大きな不満はもとより小さな不平の一つさえも起こっていなかったであろう。

規制論の論拠ははじめから薄弱だった。日本協会が頑強に反対意見をはねのけているのをハタから眺めていると「意地になっている」としか映らなかった。

しかし、最近になって日本協会の考えかたを理解しようとする動きが芽生えはじめていたのも事実である。

あきらめムードが作用していたにせよ、少くとも日本協会にとっては〝いい方向〟だったハズ。

その矢先に態度変更では合議スタッフが球界の現状・情勢の掌握さえも満足にしていないということになりはしないか。

これは、今回の一件に限ったことではなく、「現場不在」「地方不在」といった批判が出るのも当然だ。

田村会長は、9月21日に全国理事会を招集して、合議スタッフの姿勢などを説明するというが、スタッフの再編成はさけられまい。

「世界選手権基金運動」が流産しかかっているなど他の問題もあり地域代表、加盟団体代表をメンバーに加えるべきだと思う。いずれにせよ、大事を前にして日本協会が相も変らず幼稚な混乱を招いているのはなさけない。

杉山　茂

五輪への参加は8ケ国 男子

ブ会長書簡 女子ハンドボールの実施も決まる

8月14日に各報道機関が伝えたところによると13日体協で開かれたJOC（日本オリンピック委員会）常任委員会で、IOC（国際オリンピック委員会）のブランデージ会長が各国際競技連盟会長にあてた回状が明きらかにされたという。

それによると「オリンピックにおける男子団体競技の大会参加数はすべて8チームに縮少する（従来は16チーム）」「女子のハンドボール、バスケットボール、バレーボールの実施を認め、大会参加数は男子同様8チームとする」などがあげられている。

これまで不明確のままいくつかの情報や推測がとびかっていたもので、今回はっきりとそれが裏付けられたといえ大きな反響をよぶだろう。

しかし、今回の報道でもこれらのことをいつの大会から実施されるかについては「ミュンヘンからだろう」という程度で、なお不明の部分も多い。

ハンドボールの場合、その実施がほとんで難しいといわれていた女子種目の採用が報じられた反面男子が16から一気に半数にしぼられたのは問題だ。

藤本常務理事（国際渉外委員）は『16から8となれば、来春の世界選手権の上位8ケ国をミュンヘンオリンピックに出場させるというIHF（国際ハンドボール連盟）の決定は再検討されることになるだろう。

世界選手権の上位2ケ国と開催国（西ドイツ）以外の5つのワクをめぐって世界予選が行われるといったことになったら勝ち抜くのは大変だと思う。

女子の採用は日本にとっては〃朗報〃とうけとってよいのではないか』といっている。

なお、8月25日現在、IHFはこの件に関する見解を一切発表していない。

全日本（候補・強化合同）が第5次合宿

日本協会では来春の世界選手権に出場する全日本男子代表の強化を進めているが、8月24日から27日までの4日間、東京・日本青少年総合センターに全日本第2次候補（欧州遠征メンバー）17人と全日本強化選手23人を集めて合宿を行った。

1月末の初合宿から数えて第5次にあたるが、候補・強化選手合同で行うのは1月についで2度目。

日本協会と選手強対委ではこの合宿を参考に9月上旬全日本第3次候補として約20名を選こう、9月21日の全国理事会で承認をうける予定。

第3次候補による強化合宿は9月末と11月12日から16日までの2回いずれも東京で行う。

世界選手権代表の最終発表は12月21日（全日本選抜最終日・東京）に予定され、代表チームの合宿は12月22日〜26日、45年1月19日〜25日、2月2日〜10日の3回行はれる予定。

「強化選手」に追加なし

日本協会では夏の各全日本選手権終了後、選手強化対策委員を中心として全日本強化選手に新しく加える人材の選こうを行ったが追加選手の発表はなかった。

協議の席上、二〜三名の若手有望選手の名があげられたが、今回の選こうはあくまで来春の世界選手権に備えてのもので、国際的な即戦力という点からみると現在のままで支障はないということになったもの。

全日本男子、国内を転戦

日本協会と選手強対委では全日本男子ナショナルチームの国内転戦（全日本国内サーキット）を次の日程で行うことになり発表した。

メンバーは、村田強対委員長を監督に、さきにヨーロッパ遠征した全日本第二次候補17選手で勝、竹野両コーチも参加する。なお、9月19日夜、名古屋で全愛知とも対戦する予定。

▽第1戦（熊本）9月3日午後6時　対全熊本▽第2戦（下松）、4日午後5時30分　対全山口▽第3戦（大阪）5日午後6時20分　対全大阪▽第4戦（京都）6日午後5時30分　対全京都▽第5戦（高岡）8日午後6時　対氷見ク

年内に女子の強化も着手か

選手強対委では男子のトップレベルの強化に併行して女子の第一線級選手の技術向上をはかることになり、おそくとも12月の全日本選抜選手権（東京）までにその実施案をつくりあげることになった。

これは、ミュンヘン・オリンピックで女子ハンドボールの実施が取り沙汰されていることと、2年後に世界選手権（開催地など詳細未決定）を控えているためで、当初は来春の男子世界選手権後に女子の強化部門を確立する予定であったが、国際的な動向などから急ぎ着手されることになった。

村田強対委員長は『強対委のなかに男子部長、女子部長を置きそれぞれの強化を進めるようにしたい。どのような方法で実施するかはまだ白紙だが、私個人としては12月の全日本選抜終了後に全日本第1次候補を20〜40名ほどリストアップしたらよいように思う』といっている。

全国理事会を招集（9月21日）

日本協会では9月21日午前10時から東京代々木の日本体育協会で全国理事会を開催する。

世界選手権第3次候補の発表、45年度事業の検討などのほか、田村会長は機構の一部改訂を行いたい意向。

第16回 IHF国際審判講習会報告

日本協会理事
山田　計

第16回ＩＨＦ主催の国際審判講習会は昭和44年7月5日夕刻より13日迄スペインマドリード市スポーツ協会内で行われた。

参加したのは東ドイツ(2名)、西ドイツ(5名)、アルゼリヤ(2名)、オーストリヤ(2名)、ベルギー(2名)、チェコスロバキャ(4名)、デンマーク(3名)、フィイランド(2名)、フランス(4名)、オランダ(3名)、ハンガリー(2名)、アイスランド(1名)、イスラエル(2名)、イタリヤ(2名)、日本(1名)、リビヤ(3名)、ノールウェー(3名)、ポーランド(2名)、ポルトガル(4名)、スウェーデン(3名)、スイス(2名)、ルーマニヤ(3名)、アラブ連合共和国(2名)、ユーゴスラビヤ(4名)、ソ連(2名)、スペイン(15名)の27ケ国83名。他にコミッショナーの委員長エミル・ホルル氏を初め6名全員が出席しスペイン協会の協力で今迄とちがった講習会で午前中学課と各種判定の基準をモデルチームを使って実技で説明午後は参加審判員が必ず審判を担当、他にコミッショナーによる審判割当により午後10時30分までギッシリの日課だった。日程は

▽7月5日午後8時迄にマドリードスポーツ協会に到着を報告

▽七月六日出席者スポーツ協会の宿舎決定

午後8時より身体教育とスポーツについて（講議）

▽七月七日8時—8時45分朝食

9時—開会式引続き委員長による2人審判方法について（講議）

ルーマニア協会提出による2人制審判の映画(説明はクンスト氏)

10時30分—ブカレストチームによる2人制審判

13時30分—昼食、17時30分迄休養。17時30分より公式試合

参加国はルーマニヤ、スペイン、フランス、ポーランドの4ケ国のナショナルチームにより3試合・21時30分より夕食

▽七月八日9時より今日の2人割審判に到るまでについて（説明）

10時30分よりチームを使つての攻防における審判方法(判定方法)

17時30より公式戦

▽七月九日9時より今迄行なつた審判に対する質問事項に対するコミッショナーの解答

10時30分よりモデルチームによる判定（各種）方法。17時30分より公式戦決勝を含み3戦。

決勝戦は小生及びアイスランドの2名で審判を行う

▽七月十日9時30分出発審判員全員ナバセラーダとセゴビヤ地方に遠足

▽七月十一日9時より参加者から提出された質問事項に対する解答

17時30分より参加国チームによる30分ゲーム

12時より参加国代表者会議

▽七月十二日9時より第十六回国際審判講習会でおそわたたこと（総括）。10時30分より（モデルチームを使つて判定方法）

20時より閉会式。終了証書と記念品の授与並にお別れパーテー午前。4時終了

マドリード市のレティロ公園内レストランで行はれた。

▽七月十三日9時より審判員全員で親善試合

12時30分解散

×……×

エミールホルル氏の講議は、一九七〇年の世界選手権大会プレオリンピック並にオリンピックに於けるハンドボール競技がいかにあるべきか、特に審判員の位置精神的技術的な面を強調し又2人制になつて初めての講習会である為各国の判定を統一するといつた彼独特の熱のこもつた講演であつた。

複審判を実施して初めての講習会である為第一日は各国で行なつている審判法で行なつた。中には7mスローを与へる度にセンターレフリーとゴールレフリーがコートを交代する国もあつたが現在日本で行なつている方法に統一された。

レフェリーの練習台になつた参加チームは「ルーマニヤナショナ

ルチーム」「フランスナショナルチーム」「スペインナショナルチーム」「ポーランドナショナルチーム」の四ケ国にジュニヤーチームとして「スペイン」「ポルトガル」の両チームとスペイン国内の6クラブ。地元の6クラブは選手権大会を行いレフリーのレベルを挙げると共に国際的に決定基準の統一を行なつた。又審判員は事務局より毎日ジュニアか女子の部を一試合審判を行う割当があり、コミツショナーからは公式戦の割当があつた。前日審判を行なつた審判員に対し参加審判員より各種質問書が提出され、それに対し統一解釈をコミツショナーが解答〝思想〟を統一した。又ルーマニヤナショナルチームを使つて、クンスト氏が実技でもつて判定の統一をはかる為指導を行なつた。

毎日、此の指導があり内容は、ブロックの問題、7mスロー、ポストプレー、ベンチの問題、ストーリング、退場等についてこまかく指導が行われ国際的な統一をめざした。

又参加審判員を四つのグループに分け二日目毎に試合を行い試合中に於けるあらゆる判定に対するケースを体験しながら討議した。

次に復審制における統一した事項を挙げる（但し日本と変つている点のみ）

一、ベンチは十二名の選手と監督コーチ、ドクターを含め四名計十六名

一、審判が選手の身体にふれる事はこのましくない。判定等を下す場合はゼスチャーではつきり示す

一、ゼスチャーは早くはつきりと示し特に退場の場合は確認する事

一、フリースロー。特にフリースローライン附近の時は3mをはつきりと示す事

一、パス、シュートの場合フィルドプレーヤーは足を使つて防禦する事はいけない。

一、室内でのゲームでボールが天井に当つた場合は次の判定を行う

①、ボールが天井に当つてサイドライン外に落ちた場合は天井に当てた反対側チームのスローイン

②、ボールが天井に当つてフィルドに落ちた場合はレフリースロー

③、ボールが、天井に当つてフリスローライン内に落ちた場合はレフリースロー

④、ボールが天井に当つてゴールエリヤ内に落ちた場合はキーパーのボール

一、補欠選手はベンチ以外にいてはいけない（トレーニングの為ならば良い）レフリーは注意する。

一、負傷者が出た時はレフリーは中止を命じ、まず本部或はベンチに居るドクターを呼びそれ迄は誰も競技場に入れてはいけない。ドクターの診断の結果を見て入れる

一、ストーリング攻撃の意志がないと審判が判断した場合,時間等に関係なく課す。マンツウマンの場合も同様である。

一、反則を取られた時は、その場にボールを置く事。時間をかせぐ為ボールを反対方面等に投げた場合は退場を命ず（2分間）

一、レフリーに対しレフリーをバトウした言動をした場合は重い退場を命ず

一、試合中ベンチよりレフリーをばとうした言動した場合は試合に参加させない。

一、攻撃側の者がエリヤー内にジャンプしてシュートせず中央味方にパス、中央の者はシュートした場合は先にパスした者はラインクロースにあらず。但しキーパーをじやました場合は反則となる。

一、攻撃者がエリヤーラインにそつて動いている場合防禦者につかまれラインをふんだ場合は笛を吹かない。但しきつくなん度も突いた場合は攻撃側にフリースローを与へる

一、ポストにいる攻撃者がゴールエリヤーをふみ位置を変更した場合は反則を取る。

各地域にコミツシヨンを

ところで7月11日に開かれた各国代表者会議はＩＨＦの将来構想ともいえるものにふれた意義のある会合であった。多くの事項はエミール・ホルル氏によって説明されたが主な点は次のようなことであった。

1、各州(地域・大陸)に将来コミッショナーを置き

本部と常に連絡を取りその州（地域・大陸）の統一をはかる事

2、復審判の場合は一人はボール中心に見、他の一人は全般的に見る事が出来る。此の利点を充分生かし又、2つの目で見るよりも四つの目で見た場合互に助け合う事が出来る。ハンドボールの試合に於て少しでもぎもんな点があつてはいけないので2人の協力が必要である。その為には各国とも審判員は精神的にも技術的にも充分研究すること、

各州（地域・大陸）にコミッションをおくという考えかたはＩＨＦ本部と下部の連結を密にすると同時に業務の円滑化を企る狙いがあることはいうまでもない。

〝アジア〟の確立がこの面からも考えられてよい時期だろう。

第2点については、復審制という新システムに対するＩＨＦの配慮を示すもので、今回の講習会でも多くの問題が提起されたのだが判定解釈の統一というものがいかに難しいかを物語るといってもよいと思う。審判はつねに研究し、己をみがかねばならない－日本協会も審判部が中心となって〝国内の判定統一〟を機会あるごとに研さんし〝アジアの判定思想〟に発展することを期待したい。（完）

全立教、執念の2連勝飾る 大崎電気に逆転勝ち

～第21回全日本総合選手権・盛岡市～

女子も大洋デパートが連続の栄冠

今年度のチャンピオン・チームを決める第21回全日本総合選手権は8月9日から13日までの5日間盛岡市の岩手県営球技場に男子32、女子16の国内トップチームが勢揃いして行われた。

男子は大会2週間前にナショナル・プレイヤーの所属復帰が決まりいちだんの盛りあがりを見せた。ベスト・フオアには予想どおり全立教、日体大、芝浦工大の関東学生勢と実業団の雄・大崎電気が勝ち残った。

準決勝の2試合は、近来にない激しい斗志のぶつかりあいとなったが主力にナショナルプレイヤーを持つ全立教と大崎電気が現役チームの〃力〃をかわして進出。決勝戦は全立教が動きの鈍い大崎電気に後半鮮やかな逆転勝ち、2年連続3度目の優勝を飾った。

女子は予選リーグB組で優勝候補の一角にあげられていた田村紡（三重）がメンバーの若さをベテラン揃いの美和ク（東京）につかれて敗れるという大波乱があったが、結局決勝は大洋デパート（熊本）―大崎電気（埼玉）の実業団同士で争い総合力に優る大洋デパートが2年連続4度目の優勝を遂げた。

三景、関西大を降す

男子トーナメント

▽1回戦

全立教（協・東京）33（15―9、18―8）17 宗形製作所（近畿・大阪）

盛岡商友会（岩手）24（15―8、9―4）12 坂出常盤ク（四国・香川）

常盤工業（実・岐阜）28（14―9、14―9）18 仙台大（東北・宮城）

大崎電気（協・埼玉）41（22―0、19―6）6 東北大（学・宮城）

全東教大（関東・東京）25（16―8、9―7）15 奈良ク（近畿・奈良）

法政大（学・東京）27（17―6、10―6）12 日新製鋼呉（中国・広島）

岩手教員ク（岩手）21（11―10、10―7）17 松山商大（学・愛媛）

明治大（学・東京）24（12―7、12―2）9 長崎教員（九州・長崎）

三景（実・東京）17（6―7、11―6）13 関西大（学・大阪）

芝浦工大（学・東京）32（15―9、17―11）20 本田技研（東海・三重）

同志社大（学・京都）26（12―7、14―6）13 日進商会（実・神奈川）

中央大（学・東京）25（15―5、10―7）12 福井教員（教・福井）

大阪イグルス（教・大阪）31（17―11、14―14）25 全国学院（関東・栃木）

中京大（学・愛知）21（13―4、8―8）12 氷見ク（北信越・富山）

住友化学菊本（実・愛媛）19（8―8、11―4）12 大阪経大（学・大阪）

日体大（協・東京）24（12―4、12―7）11 富士鉄名古屋（東海・愛知）

（注）協＝日本協会推薦、学＝全日本学連推薦、実＝全日本実連推薦、教＝全日本教職員連推薦

賞されるクラブ勢の気力

○……注目の好カード三景×関大は、15分まで4―4と期待どおり白熱したが、このあと三景は江名の好リードから16分外間、18分内藤、19分高梨と連続3ゴール、優位に立った。後半関大は許のサイドからのシュートがよく決まり19分には松田のゲットで12―14と追いあげた。

しかし、三景はGK尾形の好守から速攻の芽を活かし25分までに3点を加え逃げ切った。関大はディフェンスの詰めが甘く、追いこんでもすぐ相手の反撃を許したのが一つの敗因だ。

大阪イーグルス×全国学院栃木も好試合。前半22分大阪が12―6とリードした時は一方的な経過で

全日本チャンピオンチーム

	男子	女子
昭12	大塚クラブ	……………
昭13	日体専	……………
昭15	日体	倉敷高女
昭17	日体倶	倉敷高女
①昭25.1	日体桜	愛知クラブ
②昭25.11	スワロー松	全山梨
③昭26	スワロー	東京芙蓉クラブ
④昭27	セントポールA	……………
⑤昭28	全日体大	全静岡城北高
⑥昭29	全日体大	全静岡城北高
⑦昭30	西日本日体OB	水海道二高
⑧昭31	全日体大	半田高
⑨昭32	全日体大	愛知紡
⑩昭33	全日体大	愛知紡
⑪昭34	全芝浦工大	愛知紡
⑫昭35	芝浦工大	愛知紡
⑬昭36	芝浦工大	愛知紡
⑭昭37	大崎電気	愛知紡
⑮昭38	立教大	大洋デパート
⑯昭39	大崎電気	大崎電気
⑰昭40	大崎電気	大洋デパート
⑱昭41	全立教	大崎電気
⑲昭42	大崎電気	田村紡
⑳昭43	全立教	大洋デパート
㉑昭44	全立教	大洋デパート

○内数字は全日本総合の回数

終るかにみえたが、全国学院の猛反撃はそのあと黒岩の巧技を中心に8点を奪い同点で前半を終った。

後半、大阪は最初の10分間に井上の3ゴールなどで23―19と再び主導権を握り、その後は互角に試合を進めて逃げこんだ。大阪は守りに粘りがなく苦しい試合となったが、むしろこれは全国学院の気力にあふれた攻撃ぶりを賞したい。

氷見クは中京大の若さにまかせたスピードのスキを巧みについて食いさがり後半11分まで12―12。終盤はスタミナを欠いて中京大の攻撃を防ぎ切れなかったが善戦だった。

奈良クも有力候補の全東京教大に対し相変らず元気な鳥井を軸に自分のペースでうまく試合を運んだ。後半2分には9―8と逆転したが、このあと全東京教大・大西の強引なシュートに得点を許し敗退した。

このほか日体大、芝浦工大に挑んだ富士製鉄名古屋と本田技研の進境が目立ち、大阪経大戦で前半一気に勝負を決めた住化菊本の試合ぶりも注目された。

大崎、全東教大を破る
同大、大阪イーグルに惜敗

▽2回戦

全立教 29（17―8、12―6）14 法政大

法政は速いパスワークで前半20分まで互角に試合を進めたが、全立教も次第に調子をあげてペースを握り、後半は相手のシュートミスに乗じ倉前、戸田らが好ゲットで制勝した。（佐野）

大崎電気 20（12―8、8―5）13 全東京教大

大崎はコンビネーションプレーが本調子ではなく思うように得点があげられなかったが、全東教大のポストプレーを中心とした攻撃を早いつぶしでおさえ順当勝ち、巧者揃いらしいところをみせた。

全東教大は先行して試合のペースを握る策戦が実らず、終始相手に主導権をとられて、散発的に反撃を示しただけだった。（佐々木）

中央大 24（15―9、9―9）18 住友化学菊本

互いに持ち味を活かしあう接戦となり勝負は後半にかけられた。

中大は後半8分10―11から喜田佐藤要、長広の得点で14―11とようやく先行、その後の得点の入れ合いにも余祐をもてた。住化の進境が賞される一戦だったが、守から攻への転換のスピードの差が明暗を色分けた。（近藤）

大阪イーグルス 22（15―7、7―7）14 同志社大

前半は同型のチームプレーで一進一退だったが、後半に入ると大阪は同志社の若さを封じ自分のペースで試合を進め、速攻、セットを使い分けて10分12―8、20分16―11と着実にリード、同志社の反撃をかわした。同志社は攻守とも単調で、ベテラン揃いの大阪にしてやられた。（佐野）

常盤工業 27（12―10、15―6）16 岩手教員ク

常盤は立ちあがりからサイド、45度からの攻撃で岩手をゆさぶった。岩手は横パスが多く相手の守りを崩せず攻撃変化の差が得点にも現れた。後半岩手はダブルポストから互角に試合を進めただけに前半の凡攻が惜しまれた。（砂長）

明治大 28（14―8、14―7）15 盛岡商友会

明大はスピーディなチームプレーで全員がムラなく得点、後半も多彩な変化攻撃から加点した。盛岡は個人技にたよりすぎ、現役学生とクラブの条件差が試合運びに現れた。明大が若さにまかせて荒いプレーを見せたのは拙い。（佐々木）

芝浦工大 25（11―5、14―3）8 中京大

チームプレーに徹した芝浦のワンサイドゲーム。中京はスピードこそあったがパスの乱れが目立ち相手に得点のチャンスを与え自滅してしまった。（鈴木）

日体大 20（13―3、7―4）7 三景

前半は互いに相手ディフェンスを突き破れず25分まで4―3という〝貧打〟戦。日体はこのあと斎藤の3ゴールで7―3としどうにか主導権を握った。

後半、日体大はようやく攻撃にテンポが出てほとんどのチャンスを得点に結びつける一方、ディフェンスを固めて22分まで10連続ゴール、17―4と差を開いて試合を決めた。

三景は、日体大の激しい守りに前半にもまして攻め口をつぶされ予想外の大敗を喫した。（藤田）

全立教、地力を発揮

▽準々決勝

全立教 24（14―7、10―5）12 大阪イーグルス

【大阪】		得
GK	島崎	0
GK	広川	0
FP	東	1
FP	井上	1
FP	福井	4
FP	樫塚	1
FP	松尾	0
FP	青木	5
FP	北岡	0
FP	奥浜	0
FP	木村	0

【立教】		得
GK	馬渕	0
GK	菱形	0
FP	小野口	2
FP	加藤	2
FP	戸田	4
FP	倉前	3
FP	木野	7
FP	野田	6
FP	古谷	0
FP	原本	0
FP	吉本	0

（審・岡井、近藤）

24（2） 7MT （2）12

○……大阪が巧く先手をとって3―2としたが立教は次第に地力を発揮、20分5―4から戸田、小野口（7MT）が加点、25分1点を失ったものの、前半終了まぎわ野田の巧技などで5点差をつけた。

後半、大阪は全立教の虚をついて反撃、7分9―11と迫り興味を持たせたが、そのあと8分間に4点を失って再び点差をはなされ、勢いづいた全立教は多彩なプレーをセットからくり出して大阪ゴールを割り順当勝ちした。（柳井）

中央大の健斗空し

大崎電気 23（12―8、11―8）16 中央大

【中央】		得
GK	望月	0
GK	井上	0
FP	喜田	5
FP	植木	2
FP	長広	0
FP	平元	0
FP	植田	2
FP	中野	0
FP	武部	0
FP	佐藤	3
FP	花輪	2
FP	佐々木	2

【大崎】		得
GK	下里	0
GK	福本	0
FP	井上	3
FP	西村	1
FP	近藤	5
FP	近森	0
FP	飯田	7
FP	竹野	1
FP	旗野	1
FP	東	1
FP	平岡	4
FP	太田	0

（審・柳沢、加藤）

23（5） 7MT （1）16

○……大崎は10分までに6―1と先行、一気に押し切る態勢を整えたのだが、中央は15分すぎからようやく攻撃の調子が出て3点差に追いあげた。

後半の中央に期待がかけられたのだが、大崎は3分、8分の7MTを活かして10分には16―9とリード、中央の気勢をそいだ。

中央は学生らしくスピードのある攻撃を示したが、あと一歩大崎のディフェンスを崩す力に欠けたのは惜しかった。それに前、後半とも立ちあがりに失点を重ねたのがひびいた。（山田）

日体大の一方勝ち

日体大 29（16―4、13―3）7 明治大

得	【日体】			【明治】	得
0	本田	GK		田中	0
0	大村			藤森	0
3	井上	FP	（審・佐野 砂長）	田辺	2
1	谷藤			藤井	3
1	大川			野村	0
2	笠原			鈴下	1
4	塩崎			住田	1
4	斎藤			浦野	0
2	亀谷			未田	0
6	藤中			佐藤	0
4	氷海			安倍	0
2	松原				
29	（1）	7MT		（1）	7

○……明大が互角だったのは6分の1－1まで。そのあとは久々にベストメンバーを揃えた日体大の速攻、ロングシュート、ポストプレー、サイド攻撃など多彩な展開になすすべなく敗れた。明治は小さく早いパスを廻したものの日体大のディフェンスを最後まで崩せなかった。

常盤工業、延長で涙のむ

芝浦工大 18（4－7 10－7 …… 1－0 3－0）14 常盤工業

得	【芝浦】			【常盤】	得
0	渡辺	GK		渡辺	0
3	高鍬	FP	（審・永山 雨海）	中島	2
1	平瀬			高橋	5
3	金子			安井	0
2	大矢			山田	3
0	若崎			鳥村	2
2	明石			大野	0
3	大江			丹羽	2
0	木全			吉金	0
2	新実			桃井	0
2	森				
18	（5）	7MT		（0）	14

○……常盤は前半、チャンスを巧みに活かした高橋、丹羽の活躍で得点をあげ、守っても芝浦のクイック攻撃を封じ優位に立った。

後半、芝浦は必死の反撃に転じ7分5－8から金子の2得点と大江のゲットで同点に追いついた。一進一退10－10から常盤は19分と21分山田、22分高橋のゲットで13－10と再びペースを握ったかにみえたが、ここで消極的になり自から追はれる立ち場に廻ったのが拙く、たてつづけに3ゴールを奪はれて27分タイ（13－13）とされた。

しかし、常盤は27分30秒高橋がシュートを決めて14－13とリードしここで一ふんばりがあればよかったのが30秒後大江のゲットを許して延長にもつれこんだ。

○……こうなると若い芝浦が有利4分大矢のゲットはこの試合初の先行点となり、後半は3分以後の2分間に3点を押しこんで勝負を決めた。

八分どおり勝利を掌中にしたかとみえた常盤にとっては悔やまれる敗戦だろうが、チーム力にいちだんとたくましさが増し今後の活躍が大いに期待される。ヤマ場の多い好試合だった。（永山）

乱戦 大崎、日体大を破る

▽準決勝

大崎電気 9（4－3 5－3）6 日体大

得	【大崎】			【日体】	得
0	下里	GK		本田	0
0	福本			大村	0
0	井上	FP	（審・柳井 上田）	井上	2
3	近藤			谷藤	3
2	近森			大川	0
3	飯田			笠原	0
0	東			塩崎	0
0	平岡			斎藤	1
1	竹野			亀谷	0
0	西村			藤中	0
0	籏野			氷海	0
0	谷口			松原	0
9	（3）	7MT		（3）	6

○……〃全日本〃ともいえる大崎に対する日体大の斗志ははげしく特に粘りのあるディフェンスはさすがの大崎攻撃陣も容易につけいるスキがなかった。

試合は大崎が2分近藤、4分飯田（7MT）で先手をとったが日体大も7分井上、9分斎藤で同点16分再び井上が決めてリードした

しかし大崎は20分の7MT（飯田）で追いつき、終了直前近藤の巧技で逆転した。日体大は守りに力をかけたため攻撃にもうひとつ力強さがなかった。

○……後半も同じような展開を示したが大崎は9分近森、14分近藤のゴールで6－3。

日体大も得点機をつかんだが大崎ディフェンスのつぶしにあって実らず、互いにエキサイトして乱戦模様となった。

ラフプレーは大崎に多く、飯田が5分間退場を課されるなどあったが、日体大は17分、22分の7MTを谷藤が成功させ5－6とした以外は得点がない。

○……1点差に追はれた大崎は23分飯田、27分竹野のゲットで8－5とし勝利を確定的にしたが、このあたりは日体大の守りを突き破るたくましい攻めつぷりだった。

日体大の〃守り策戦〃は相手を10点内におさえたことで一応成功したものの、攻撃面ではノーマークや7MTシュートの失敗があり勝利を得るまでにはいたらなかった。（近藤）

芝浦工大、全立教に惜敗

全立教 16（10－8 6－7）15 芝浦工大

得	【立教】			【芝浦】	得
0	馬渕	GK		渡辺	0
0	菱形				
3	小野口	FP	（審・渋谷 鈴木）	高鍬	2
1	加藤			平瀬	0
4	戸田			金子	4
4	倉前			大矢	3
1	木野			明石	1
3	野田			大江	0
0	古谷			新実	2
				木全	0
				森	3
16	（2）	7MT		（1）	15

○……芝浦の立ちあがりは好調で森、金子のゴールなどで15分6－3とリードした。しかし全立教は次第に追いあげ20分6－6。芝浦は21分高鍬のゴールで7－6。このあと全立教は22分倉前、23分戸田のゲットで8－7と初めて先行した。芝浦は23分30秒いちどタイとしたが、全立教は2点を加えて前半を終えた。

○……後半、3分芝浦は新実のゴールで振り出しに戻したもののどうしても主導権は奪い返せず、一進一退をつづけているうちに全立教は20分14－14から21分野田の7MTで15－14、22分倉前が1点をつみ重ねた。

残り時間（8分）からしてこれで勝負が決まるとは思えなかったが全立教はそのあと無得点、芝浦は27分大矢が1点差につめただけだった。

○……勝負を分けたのはセットからの展開内容にあったようで、得点の内訳をみると立教はポスト6ミドル（ジャンプ）、7MT、ステップ各2、速攻3、その他1。芝浦はミドル5、ロング、ポスト各3飛びこみ2、7MT、速攻各1だった。全般的な印象としては準決勝を争うにふさわしい攻撃戦といえる。（関川）

大崎、前半のリード実らず

▽決勝戦

全立教 18（6－9 12－5）14 大崎電気

得	【立教】			【大崎】	得
0	馬渕	GK		福本	0
				下里	0
5	小野口	FP	（審・岡井 近藤）	井上	0
0	加藤			近藤	4
1	戸田			近森	2
1	倉前			飯田	4
6	木野			東	2
5	野田			平岡	1
				竹野	0
				西村	1
18	（2）	7MT		（4）	14

○……戦前の予想はナショナルプレイヤーを揃えた大崎有利といわれたが全立教のチームプレーが大崎の個人技をみごとにはね返した。
全立教はスタートで2－0とリードしたが、大崎は積極的なカット守法から速攻機をつかみ10分には4－2と逆に優位。その後はたがいに得点を入れあったが、どちらもチームプレーからのゴールは少なかった。
○……全立教は有永が膝の故障で欠けているうえ野田、木野がマークされて動きがとれず反撃のチャンスがなかなかつかめなかった大崎が9－6で迎えた後半にコンビプレーを立て直していれば、勝負はこのまま終ってしまったかもしれない。
ところが大崎は、後半6分11－7のあと、まったく精彩を欠き一人の突進を助けるフォローもなく動いているのはボール保持者だけという拙攻で追加点があげられない。こうなると守りの面でも元気がなくなり全立教にじわじわと点差をつめられた。
○……15分10－12と追いこんだ全立教は16分木野、16分30秒野田で遂に同点、19分平岡にゲットを許したものの20分木野、21分と22分に小野口がいずれも巧みなアンダーシュートを決めて15－13。さらに25分木野、26分野田がゴールして4点差、勝負を決めた。
要所を逃さぬ木野、野田、小野口らの勝負強さが印象づけられたが若いGK馬渕の敢斗も大きな勝因だろう。大崎は最後まで個人プレーがつづき、それも中央突破だけという単調さではとても勝利は望めなかった。全立教の執念に満ちた逆転劇で盛りあがりのある好試合だった。

田村紡、美和クに屈す

女子予選リーグ

▽A組

大洋デパート（熊本） 15（11－0、4－5）5 日体大（東京）
東京重機（東京） 22（11－3、11－0）3 宮城二女高（宮城）
東京重機 13（5－5、8－4）9 日体大
大洋デパート 19（10－1、9－1）2 宮城二女高
日体大 14（8－2、6－2）4 宮城二女高
大洋デパート 13（7－2、6－5）7 東京重機

【順位】①大洋デパート②東京重機工業③日体大④宮城二女高

○……予想どおりの結果だった。
大洋の攻撃は多彩で、どの選手も鋭いシュート力を持っている。なかでも垂水、枝尾、渡辺のトリオは抜群だ。牧野、滝口、鷺谷らを主力とした重機の進境も注目してよいものがある。後半は攻防とも互角に試合を進めただけに前半14分で5－0とされた立ちあがりの失敗が惜しまれよう。日体大は重機戦前半の善戦はよかったが実業団に比べると試合運びが単調。

▽B組

田村紡（三重） 28（12－1、16－1）2 日女体大（東京）
美和ク（東京） 25（9－1、16－1）2 岩手女高（岩手）
美和ク 9（4－2、5－4）6 田村紡

【田村】得	田村		美和	【美和】得
0	渡辺美	GK	川崎	0
0	三毛	FP	山杉	1
2	若林		早川	1
2	小林		鈴木	3
1	渡辺信		黒川	1
0	金田		加藤井	2
1	辻		新島	0
0	久保田		荒川	0
0	広森		山崎	0
0	知念		加藤浪	1
			神藤	0
6	（1）	7MT	（0）	9

FP（審・嶋田、山田）

日女体大 17（5－0、12－1）1 岩手女高
美和ク 17（8－2、9－2）4 日女体大
田村紡 24（12－1、12－2）3 岩手女高

【順位】①美和ク②田村紡③日本女体大④岩手女高

○……美和クが田村紡を破った。クラブチームのベスト4進出は第13回（昭36）の三国丘ク（大阪）以来8年ぶり。
美和クは今春まで大崎の主力だった早川、鈴木、加藤井、GK川崎らで編成。〝現役〟当時よりむしろのびのびと持ち味を発揮しては、去年のレギュラーを大量に失って若さに不安の田村紡の方がはじめから〝不利〟ともいえた。試合は2－2から前半終了まぎわに美和クが鈴木、早川で加えた2点が両チームに微妙な作用を呼んだ
他の2チームは力の差がありすぎ最高権威の大会としてはあまりにも物足りなかった。

▽C組

全長崎（長崎） 20（8－3、12－5）8 東北宗形製作所（福島）
大崎電気（埼玉） 22（8－4、14－1）5 中京大（愛知）
大崎電気 23（10－2、13－4）6 東北宗形製作所
中京大 14（7－4、7－4）8 全長崎
全長崎 18（7－4、11－6）10 中京大
大崎電気 27（13－2、14－3）5 東北宗形製作所

【順位】①大崎電気②全長崎③中京大④東北宗形製作所

○……大崎に対してダークホース視される三者がどのような試合ぶりをみせるか期待がかけられたが一蹴された。石井、原、田上らの全長崎が国体を控えて強化のあとを示し2勝したのは注目される。

▽D組

三菱鉛筆（神奈川） 18（11－2、7－3）5 大阪体大（大阪）
全岩手（岩手） 6（1－4、5－1）5 ブラザー工業（愛知）
全岩手 14（9－6、5－1）7 大阪体大
三菱鉛筆 11（6－2、5－1）3 ブラザー工業
ブラザー工業 16（7－1、9－4）5 大阪体大
三菱鉛筆 10（5－2、5－1）3 全岩手

【順位】①三菱鉛筆②全岩手③ブラザー工業④大阪体大

○……注目の三菱×ブラザーは前半20分までは互角に進んだが、そのあとブラザーの調子が落ち、後半は三菱が着実に得点、一日の長を示した。ブラザーはシュート力に欠ける。
全岩手が地元の声援に応えブラザーに逆転したのはみごと。3点差をつけられて後半を迎えた全岩手は15分3－5から反撃に転じ17分八百板のゲットで同点、21分川井が逆転シュートを決めた。ブラザーは後半のチャンスをことごとく落とした拙攻がたたった。

女子決勝トーナメント

美和ク、後半に力つく

▽1回戦＝準決勝

大崎電気 13（4－3、9－3）6 美和ク

【美和】		得
GK	川崎	0
	土志田	0
FP	杉山	1
	早川	0
	鈴木	2
	黒川	0
	新島	0
	加藤井	1
	荒川	0
	山崎	2
	加藤浪	0
	神藤	0
	7MT（3）	6

【大崎】		得
GK	山田	0
	小堀	0
FP	久保田	0
	小林	0
	木幡	2
	三浦	1
	栗林	0
	志摩	2
	山崎	1
	寺尾	4
	山本	3
	長谷川	0
	7MT（0）	13

（審・由利、梅野）

○……姉妹チーム同志。大崎は出足のよいカットから前半20分4－1としたが、美和クも巧いセットから終盤に得点、勝負を後半へ持ちこんだ。しかし時間が経つとさすがに〝現役〟の体力がモノを云いはじめ大崎は寺尾、山本らが速攻をよく決めて20分12－4と大勢を決めた。（山口）

大洋、三菱鉛筆に制勝

大洋デパート 9（3－2、6－2）4 三菱鉛筆

【三菱】		得
GK	吉田	0
	本庄	0
FP	蓮見	1
	鈴木	1
	江川	0
	小田島	0
	姫野	2
	八重樫	0
	加藤	0
	阿保	0
	阿部	0
	林	0
	7MT（2）	4

【大洋】		得
GK	小原	0
	安部	0
FP	垂水	3
	米	0
	渡辺	2
	三宅	0
	田中	0
	枝尾	4
	島田	0
	小林	0
	蔵田	0
	剣	0
	7MT（1）	9

（審・川口、中井）

○……開始30秒大洋は左45度の攻撃から枝尾が決めたが、三菱も2分30秒姫野の7MTで1－1。大洋がこのあと3分7MT（垂水）8分得意のFTから渡辺と2点を加えたのに対し、三菱は11分鈴木が独走で3－2。華々しい両チームのスタートもここで途切れて以後約15分間無得点。

○……後半は1点づつ加えたあと大洋は13分垂水、17分枝尾がすばらしいシュートを決めて6－3と主導権を握り、三菱の反撃を1点（7MT）におさえて突きはなした。三菱は最後まで大洋の守備陣を攻めあぐんだのが敗因（嶋田）

大洋、立ちあがりから猛攻

▽決勝戦

大洋デパート 13（8－2、5－1）3 大崎電気

【大崎】		得
GK	山田	0
FP	久保田	0
	小林	1
	木幡	0
	三浦	0
	志摩	1
	山崎	0
	寺尾	0
	山本	1
	7MT（1）	3

【大洋】		得
GK	小原	0
FP	垂水	5
	米	0
	渡辺	1
	三宅	0
	田中	0
	枝尾	4
	蔵田	3
	7MT（3）	13

（審・佐々木敏、佐々木弘）

○……大崎の先制が試合のカギとされたが、立ちあがりから大洋の攻守は好調、2分、4分枝尾の連続ゴールであっさりリードした。

その後も大洋は攻撃の手をゆるめず、20分までに連続7点をたたき出して大崎に立ち直るスキを与えなかった。

○……後半も大崎はいつころにシャープなプレーが見られず、かえって傷口が拡がるばかり。大洋が存分に「強力な攻防」という定評をみせたのに対し、大崎はキャリア不足がのぞいてまったくよいところがなかった。（川口）

美和クラブ 明暗の試合ぶり 大崎電気男

盛岡で行われた全日本総合選手権で二つのチームの明暗が話題となった。

◎……〝暗〟の話題を投げかけたのは男子・大崎電気（埼玉）。

大会2週間前に日本協会が全日本チーム各選手の〝原隊復帰〟を決めたため大崎電気は8人のナショナルプレイヤーが戦列に加わり優勝は動かないものと想われた。

ところが準決勝で日体大（東京）の鋭い斗志にタジタジとなり、決勝では前半のリードも空しく全立教に敗退、2位に終ってしまった。

○……欧州帰りの巧技を期待したファンや関係者は裏切られたかっこうで、ナショナルチーム再編成の過激論までとび出す始末。竹野監督（兼選手）は『〝全日本選手〟は当然出らないと想ってチーム練習をほとんどしていなかった。10日余りではいくらなんでもコンビは整えられない』といっていた。

○……日本協会の態度変更で最も強力なチームを編成できるとみられた大崎電気が〝最大の被害者〟になったのは皮肉だが、秋のシーズンには持てる力を存分に発揮して欲しいものだ。

◎……明かるいニュースは女子・美和クラブ（東京）。

このところクラブといえば〝情熱〟だけが看板だが、堂々かっての四冠王で、この大会でも優勝候補の一つにあげられていた田村紡（三重）を降して決勝リーグへ進んだ。クラブのベスト4入りは実に8年ぶり。

○……番狂せとも騒がれたが今春まで大崎電気の主力として活躍していた早川清美、川崎幸子、鈴木功子、加藤井子さんの4人に黒川恭恵、杉山喜代子（旧姓笠原）さんといった二、三年前のトップレイヤーを加えた布陣と知ればこの勝利、うなずけるものがある。

○……6月の都民大会では大崎電気や三菱鉛筆と互角だったそうで現役勢の不甲斐なさを嘆く声も聞かれたが「ハンドボールが忘れられなくて……」とコートに戻って来た彼女らにこれからさき、ヨーロッパでみられるような〝奥さん選手〟〝ママさんチーム〟を期待する声援が盛んにとんだ。

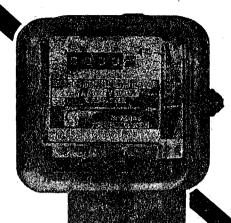
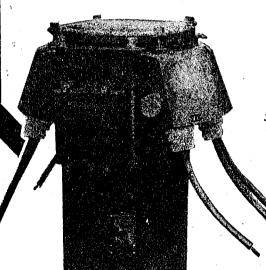
全日本選手権検討委が初会合

日本協会では懸案の全日本選手権各大会の再検討を行うため、さきに若崎常務理事（技術部長）を委員長とする小委員会を編成したが、同委では9月20日東京で初会合を開き、全国関係者に求めたアンケートを基に協議、10月の国体時までに改訂案をまとめることとなった。

Osaki

最高の確度と信頼度を持つ

電力量計

単相用	OB－7形
3相用	OW－7形
精密用	OP－3形

OB－7形広範囲単相積算電力計

計器用変成器

6600V用重予型PCT　PDN形

主要製品

電力量計・電流制限器
計器用変成器・電圧調整器
配電盤・分電盤・制御盤

大崎電氣工業株式會社

本社・五反田工場　東京都品川区東五反田2-2-7　電話東京（443）7171代表
蒲田工場　東京都大田区多摩川2－8－1　電話東京（732）6511代表
埼玉工場　埼玉県入間郡三芳村大字藤久保　電話 0492 —61— 1205

下関中央工が二連覇 男子

―第20回全日本高校ハンドボール選手権―

女子は新居浜市商（愛媛）に初栄冠

第20回全日本高等学校ハンドボール選手権大会は炎天下、群馬県富岡市の富岡高・富岡西小学校グランドを舞台に8月1日〜7日まで連日熱戦をくりひろげた。途中台風7号にかすめられるなどの事態はあったが、地元をはじめとする関係者の努力で無事日程を終了した。

男子では、優勝候補の呼び声が高かった下関中央工が中大附属高を去年につづき僅差で破り連続優勝をとげた。

女子は番狂わせが続いたが、すぐれたチームプレーを見せた新居浜市商が栃木女高を破り、初優勝をとげた。地元勢は男子の富岡高、桐生工がベスト・フオアに、女子の高崎市女高がベスト・エイトに残り、大会を大いに盛りあげた。

男子

▽一回戦

博多工高（福岡）19（10－6、9－4）10 金工大附高（石川）

初戦のため、両チームともボールが廻らず、博多塩田のリードと得点が両チームの勝敗をわけた。

添上高（奈良）16（8－3、8－8）11 相模台工（神奈川）

前半、相模台のディフェンスを添上がつき、リードを奪い、後半の相模台の追撃をふりきった。

滝川高（兵庫）11（6－2、5－3）5 寒河江高（山形）

寒河江は元気に戦ったが、滝川の速攻・ブロックレーに大差をつけられ敗れた。

函館東高（北海道）19（9－6、10－6）12 加治木高（鹿児島）

函館東が攻守にまさり圧勝。加治木は横パスが多く、これをカットされ、速攻をかけられた。

塩山商高（山梨）10（6－2、4－3）5 高知追手前高

塩山商のディフェンスの固さがめだった一戦。高知は最後までこれをくずすことができなかった。

新居浜工（愛媛）11（4－4、7－6）10 鶴崎工（大分）

好試合。力ではほとんど差がなく僅かに勝運にめぐまれた新居浜が勝を握った。

国学院栃木高 10（4－5、6－3）8 鰺ケ沢高（青森）

ワンマンチーム同士の争い。後半積極的なプレーを見せた国学院が逆転勝ちした。

豊橋商高（愛知）12（4－5、8－6）11 天城高（岡山）

互に特徴を出しあった好試合。豊橋商は後半15分まであげたリードを守りきった。

富岡高（群馬）23（10－0、13－7）7 西都商高（宮崎）

富岡の圧勝。速攻、ミドル・ポストと多彩な攻撃の富岡は面白いように得点し、大勝した。

柏崎工高（新潟）13（8－3、5－4）7 境港工高（鳥取）

柏崎は良く走り、ゲームのペースを自分のものとして、前半にリード、そのまま押しきる。

小杉高（富山）29（16－4、13－6）10 三本松高（香川）

すべての面で差がありすぎ、大差の試合となった。

中京高（愛知）20（6－0、14－2）2 新宮高（和歌山）

前半は動きが固かったが後半中京は良く走り、一方的なゲームになった。

岐山高（岐阜）12（5－3、7－4）7 洛星高（京都）

実力伯仲であったが、守備面でわずかに勝る岐山が勝利を握った

下松工高（山口）15（7－6、8－8）14 坂城高（長野）

開始当初リードした下松を坂城は良く追いかけたが、今一歩の力が足らなかった。好試合。

桐生工高（群馬）12（6－3、6－7）10 南会津高（福島）

スタートを好調に行なった桐生は後半の南会津の食い下りをくいとめ、地元の応援に答えた。

佐世保北高（長崎）24（13－0、11－10）10 数大附坂戸（埼玉）

前半佐世保のワンサイド。坂戸は後半くいさがったが、前半の差は余りにも大きかった。

湯沢高（秋田）12（5－4、7－6）10 堺工高（大阪）

スタートは堺が好調であったが湯沢もペースをとりもどし堺のシュートミスにも救われ、逃げきった。

松江工高（島根）13（7－4、6－6）10 那覇商高（沖縄）

両チームとも出足は好調。松江は速攻で加点し、前半をリード。那覇は後半良く粘ったが及ばなかった。

清水商高（静岡）13（6－2、7－5）7 八幡工高（滋賀）

清水は固いディフェンスから速攻を出して、加点。そのペースを持続し制勝。

三原工高（広島）17（9－5、8－9）14 川和高（神奈川）

三原は二段速攻のロングシュートが良く決り、前半リード。後半は単調になったがそのまま終る。

▽二回戦

下関中央工（山口）22（8－1、14－3）4 博多工高

下関はスタートから多彩な攻撃で着々と加点し、大勝した。

添上高 13（5－6、8－5）11 四日市工高（三重）

どちらもポストプレー中心の攻撃。前半は1点差で四日市。後半添上のサイド攻撃が冴え、逆転。

函館東高 15（6－8、9－4）12 滝川高

前半はどちらも走れない凡戦。後半、滝川のミスを速攻から確実に結びつけた函館の走り勝ち。

枚方高（大阪）14（5－4、9－2）6 塩山商高

枚方は変化あるディフェンスで良く守り、後半には攻撃面でも走り勝った。

新居浜工高 16（7－1、9－5）6 羽水高（福井）

新居浜の一方的ゲーム。羽水はよく健斗したが、力の差はどうし

ようもなかった。

国学院栃木高　10（7—3、3—6）9　豊橋商高

前半は栃木のポストプレーが冴え、豊橋は後半、速攻でこれを追ったが追いきれなかった。

富岡高　13（6—5、7—7）12　古川工高（宮城）

僅かに地元富岡が勝ったが、終始一進一退の好ゲームであった。両チームとも攻防両面で非常に好印象を残した。

神代高（東京）　14（5—5、9—3）8　柏崎工高

前半は互角であったが、後半の神代の足が勝利を握った。

マリスト（熊本）　16（8—4、8—10）14　小杉高

前半はマリストの速攻が冴えてリード、小杉は後半1点差までつめよつたが、及ばなかった。

中京高　13（3—4、10—4）8　麻生高（茨城）

前半はどちらも慎重に試合を運び3—4。後半中京はキーパーからの好配球を得点に結びつけた。

下松工高　5（2—1、3—2）3　岐山高

両チームともシュートミスが多く、得点は少なかった。岐山は一時リードしたが、結局下松の粘りにやられた。

桐生工高　24（7—2、17—6）8　木更津高（千葉）

桐生は着々と加点をした。またキーパーの好守もあり、木更津につけいるスキを与えなかった。

佐世保北高　26（10—5、16—1）6　徳島東工高

佐世保は前半もたつき気味だったが、後半に入ると速攻で一気にスパートし、大差をつけた。

湯沢高　13（6—3、7—4）7　松江工高

湯沢はチャンスを確実に活かした。松江は湯沢の守備にとまどい得点をあまりあげられなかった。

清水商高　17（8—5、9—11）16　盛岡一高（岩手）

後半24分、同点から清水が2点、盛岡が1点をとるという大激戦。互いのもち味を良く出しあった好試合であった。

中大附高（東京）　20（8—7、11—7）14　三原工高

スタートから激しい攻防を展開僅かに総合力に勝る中大附が次第に点差を拡げた。

▽三回戦

下関中央工高　13（5—4、8—5）9　添上高

下関はポスト、添上はミドルと前半は全く互角。下関は最後に調子を出し、添上をふりきった。

枚方高　19（8—5、11—8）13　函館商高

決定的な決め手がない両チーム速攻を多くものにした枚方が勝利を握った。

新居浜工高　6（4—1、2—1）2　国学院栃木高

試合開始前より雨が降り、グランドの状態の良い開始5分間に3得点をした新居浜の先制勝ち。

富岡高　10（5—6、4—3、1—0、0—1）10　神代高

（富岡の抽せん勝）

富岡はポスト、神代はロングと互の持ち味を生かし、シーソーゲームを展開。富岡は後半21分にリードを奪い、逃げきれるかに見えたが、神代も山岡で追いつき、延長に入る。延長後は7mTで1点づつとり抽せん。印象深い好試合。

中京商　15（9—6、4—7、0—0、2—0）13　マリスト学院高

前半は中京のペース。後半に入るとマリストは中京のミスをよくつき、一時は3点リード。中京はやっとのことで延長にもちこみ延長後は2点をあげ辛勝した。

桐生工高　13（7—4、6—6）10　下松工高

桐生工は前半の3点差をそのままもちこし、押しきった。下松も良く粘ったが、2点差につめるまでだった。

佐世保北高　10（6—3、4—2）5　湯沢高

雨のため、グランド状態が悪かった。速攻を生した佐世保が主導権を握って試合を進めた。佐世保のGKの活躍がめだつた。

中大附高　16（7—6、9—7）13　清水商高

両チームとも多彩な攻撃でシーソーゲームを展開。リードは中大附がとる場合が多かったが、タイになること8度、後半21分以後3点を連取した中大附の勝利。

▽準々決勝

下関中央工高　8（2—5、6—0）5　枚方高

【下関】	得		【枚方】	得
山徳	0	GK	穴倉	0
小山	0			
古谷	1	FP	西山	1
西島	1		平井	0
中川	2		入江	0
中野	2		福井	0
酒井	2		中出	0
皆本	0		横川	2
田中	0		和気	2
吉村	0		川原	0
稲葉	0		松本	0
西村	0		岡野	0

（審・望月　徳前）

5（2）　7MT　（3）8

前半、下関は枚方を攻めあぐみ仲々得点できない。一方枚方はノビノビと試合をし、3点のリードで後半下関はサイドからのシュートで追いこみ20分以後3点を連取し守りも立ち直って勝った。

富岡高　12（5—4、7—6）10　新居浜工高

【新居】	得		【富岡】	得
一色	0	GK	須貝	0
蝶野	0		奥平	0
鷹田	0	FP	永井邦	5
渡辺	1		松井	0
伊藤	0		矢島	0
藤田	3		永井正	2
橋本	2		中沢	0
喜井	4		上原	5
杉山	0		田村	0
吉本	0		滝上	0
神野	0		石井	0
曽我部	0			

（審・田村　中沢）

12（2）　7MT　（2）10

地元の圧倒的な声援に富岡が応えた。五度も同点になるという大接戦。富岡はポストと速攻。新居浜はミドルとポストで対抗、常に富岡が一歩リードしていたが22分には10—10、その後富岡は永井邦上原が浮き気味の守備陣の間からミドルを決め、勝利を掌中にした。

桐生工高　12（7—2、5—5）7　中京高

【桐生】	得		【中京】	得
吉田	0	GK	福井	0
星野	0		森	0
島田	0	FP	村田	1
天沼	0		加藤	0
川浦	1		小川	2
川島	7		森留	0
江原	1		山川	1
向田	0		梶村	3
小椋	1		三浦	0
渡辺	2		中島	0
丹羽	0		布垣	0
吉間	0		岸見	0

（審・住尾　斎藤）

7（1）　7MT　（3）12

両チームともゆっくりした試合運び、桐生は粘こい攻撃で着々加点し、前半は7—2で終了。後半中京は速攻で追いあげ、19分には2点差にしたが、桐生にその後3点連を取され、万事窮す。

中大附高　21（11—3、10—9）12　佐世保北高

【中附】	得		【佐北】	得
吉江	0	GK	都知木	0
柴田	0		鐘ケ江	0
上村	6	FP	山高	0
佐野	4		吉田	1
松下	2		牧野	6
榎本	2		上村	3
古畑	3		浦田	1
今関	4		力武	1
小川	0		若松	0
佐藤	0		明石	0
清水	0		大庭	0
田村	0		中村	0

（審・岡田　石切山）

12（5）　7MT　（3）21

スタートから中大附は多彩な攻撃で快調に加点、ディフェンスも固く、佐世保をよせつけなかった。後半もそのままの調子を維持し、

メンバーを入れ替えるなど余裕をもった試合ぶりで楽勝した。

遅かった富岡の反撃

▽同準決勝

下関中央工 9（4－1、5－5）6 富岡高

得	【下関】		【富岡】	得
0	山徳	GK	須貝	0
4	古谷	FP	永井邦	2
1	西島		松井	0
1	中川		矢島	1
1	中野		永井正	2
1	酒井		中沢	0
1	皆本		上原	1
0	吉村		田村	0
9	(4)	7MT	(2)	6

（審・望月、金原）

両チームとも、ポストプレーにこだわりすぎ、ディフェンスの密集の中へ入りこんでは自滅、動きの鈍い試合となったが、下関はブロックプレーから、巧く7MTを誘いだし優位に立った。後半開始後、下関は酒井の巧技から連続3点を奪って7－1と大きく差を開き、追いすがる富岡を振り切った。

富岡は、コートを二重三重にとりかこむ地元の声援にかえって緊張しすぎたようで、固さがほぐれた時には、すでに挽回不能な点差になっていた。前半の守りの失敗が惜しまれよう。

中大附、前半で勝負決める

中央大附 15（6－1、9－7）8 桐生工

得	【中央】		【桐工】	得
0	吉近	GK	吉田	0
2	上村	FP	島田	0
3	佐野		天沼	0
2	松下		川浦	0
3	榎本		川島	2
2	古畑		江原	1
3	今関		向田	0
			渡辺	5
			小椋	0
15	(1)	7MT	(1)	8

（審・佐分、徳前）

中大附は、桐工のスローペースに乗ぜられることなく、チャンスをつかむと俊足FP陣がすばらしい突進で相手陣内に攻めこみ、クイックパスから次々とシュートを決めて、前半で大差をつけた。

桐生は後半、セットから長身渡辺に球を集め懸命の反撃を試み、13分には6－9としたが、その後再び、中大附の速攻に得点を許し敗退した。中大附勝因の一つにGK吉近の好守と大たんながら正確な球出しがあげられる。

下関、ミドル攻撃実る
追いこみ空し中大附

▽同決勝

下関中央工 12（8－6、4－5）11 中央大附

得	【下関】		【中央】	得
0	山徳	GK	吉近	0
6	古谷	FP	上村	1
1	西島		佐野	3
2	中川		松下	2
0	中野		榎本	5
2	酒井		古畑	0
1	皆本		今関	0
12	(0)	7MT	(0)	11

（審・中西、山田）

2年づつけての対決。試合は2分中大附・佐野のゲットで始り、下関もすぐ酒井のミドルシュートで同点、4分中大附、榎本、5分下関・中川とまったく互角の滑り出しだった。

このあと中大附のシュートとパスが下関の巧みなカットにあって不発に終ったのに対し、下関は得意のポスト（ブロック）プレーをあまり用いず、相手ディフェンスの外側から酒井、古谷が積極的にシュートを射ちこむ策戦がみごとに成功、16分には7－4と優位に立った。

2点差の後半、下関は7分と9分古谷の連続ゴールで10－6とはなしたのだが、ペースダウンのすきを榎本を中心とする中大附の激しい反撃にあって21分には10－11と追いこまれた。

しかし22分古谷の巧技で再び2点差となり、中大附の猛攻を24分榎本の1点におさえて逃げ切った。ミドル攻撃の成功に下関の勝因はあったが、要所で堅守をみせたGK山徳のプレーもみごと。特に後半3分、8－6の場面でノーマークの古畑に対して、エリアを飛び出してシュートを食いとめた好判断は絶讃されよう。このプレーはホールディングを課せられてもしかたのないクロスしたもので、結果的には勝負の明暗につながる〝微妙なやま場〟といってよかった。

気力充実のプレーを応酬させた好試合であった。

槙敏夫下関中央工監督の話。今シーズンは、まったく動きがぎこちなく、この大会でも苦しい試合がつづいて、どうなることかと心配していた。幸い、選手たちが去年の優勝で自信を得、韓国に遠征したことで誇りを持っていることが大きな支えとなって勝ち抜くことができた。

女子

▽一回戦

高岡女高（富山）20（8－2、12－2）4 深谷女高（埼玉）

高岡の完勝。高岡は小泉を中心にシュートチャンスを確実に得点した。深谷は高岡の固い守備を攻めきれなかった。

室蘭商高（北海道）7（3－4、4－2）6 宮城第二女高

室蘭は前半の7MTの失敗がひびき苦しんだが、なんとか宮城の喰いさがりをかわして辛勝した。

栃木女高 15（5－5、10－4）9 島原農高（長崎）

前半は互格の争い。後半は栃木の一方的なペースとなり6点差がついた。

静岡城北高 13（7－2、6－6）8 常盤高（新潟）

スタートは常盤快調であったが以後城北の速攻ペース。後半常盤は追いあげたが及ばなかった。

甲子園学院（兵庫）7（3－2、4－2）4 神埼農高（長崎）

セットプレーを中心にする両チーム。後半甲子園の脚力が勝り、速攻が得点となった。

前橋市女商（群馬）10（6－3、4－1）4 高知西高

前半は高知なんとかもちこたえていたが、後半前橋の速攻とポストプレーに点差をあけられた。

小平高（東京）7（4－2、3－2）4 筑紫女高（福岡）

小平のカットからの速攻が点差となって現れた。筑紫は攻防両面でミスが多く、敗因となった。

小禄高（沖縄）8（3－2、5－1）3 池田高（徳島）

前半は互格の争い。後半、きっかけをつかんだ小禄は自分のペースに相手をひきこみ勝った。

平塚江南（神奈川）8（2－2、6－4）6 粉河高（和歌山）

前半は両チームとも単調な攻撃。後半は平塚がミドルシュート・速攻を良く決め、初戦を飾った。

熊本市立高 8（4－5、4－1）6 昭和学院高（千葉）

前半熊本はミドルシュート、昭和はサイドからのシュートと7MTで接戦。後半熊本は切通、月田のミドルが決った、昭和は前半に良く4点をあげた金子に球を集めることができず1点をあげたにとどまり、第1戦で敗れ去った。

和洋女高（秋田）14（9―1、5―2）3 生駒高（奈良）

両チームの総合力は格段の差があり、一方的な試合となった。

精華女高（京都）13（7―6、6―5）11 小諸商高（長野）

試合の主導権は両チームの間を住き来したが、結局岩本に球を集める策戦があたった精華が勝った。

大分東商 9（3―1、6―2）3 山梨高

山梨は大分の守備を破れず、攻め手がなくよいところがなかった。

高崎市女高（群馬）10（2―4、2―2、2―1、2―0）7 竹田女高（山形）

セットプレー主体の同形チーム延長戦後の高崎の積極策が勝因。

三本松高（香川）11（4―2、7―5）7 守山女高（滋賀）

三本松脚力の勝利。守山もよくサイドを使い攻めたが、三本松の守備が一枚上だった。

八郷高（茨城）10（4―1、6―0）1 都城泉ヶ丘（宮崎）

泉ヶ丘はチャンスが見出せない間に、多彩な八郷の攻撃が点差を開いてしまった。

大谷高（大阪）6（3―1、3―2）3 桜水商高（東京）

両チームともシェート力の不足がめだった。僅かに走力に勝る大谷が勝利を握った。

花巻南高（岩手）6（2―0、4―1）1 加治木高（鹿児島）

花巻の圧勝かと思われたが、加治木の守備陣が健斗、点差はひらかなかった。後半加治木は花巻のGKの好守にはばまれ7MTの1点におわったのは悔やまれよう。

▽二回戦

高岡女高 8（4―3、4―4）7 菊池農高（熊本）

高岡の守備に重点を置いたペースを菊池は崩せず2連勝の夢がついえた。

室蘭商高 12（6―0、6―0）0 津女高（三重）

室蘭の完勝。津女高の基本技術の未熟さが得点差になった。

栃木女高 11（2―3、9―0）3 静岡城北高

前半は両チームとも良い動きを示し、迫力ある試合を展開。後半は栃木の守備を回めてからの速攻が冴え予想外の大差となった。

甲子園学院高 11（4―3、7―4）7 徳山高（山口）

得点の差は速攻をより多くゴールに結びつけたかによって決った。徳山はゴールへの結びつけかたがつまりぎみで破れた。

前橋市女高 13（8―2、5―3）5 春日丘高（大阪）

前橋は終始相手を圧倒しての完勝であった。春日丘はスタミナ切れがはっきりとみられた。

小平高 12（4―4、8―1）5 益田高（岐阜）

前半は対等であったが、後半小平の速攻・ポストプレーが良く生き、大差となった。

小禄高 11（6―4、5―3）7 真備高（岡山）

スタートの良さが小禄に活気を与え、そのまま押し切った。真備は横動きが多く、得点できなかった。小禄の成長を賞される。

平塚江南高 7（2―3、4―3、0―1、1―0）7 名古屋女商高（愛知）

（平塚江南の抽せん勝）

名女商に体力的には勝っていたが、平塚は数少いチャンスを良く生かし対抗。延長に入ってからは両チーム固くなりタイで終了。

広島第一女高 7（2―1、5―4）5 熊本市高

広島はロングシュートで着々加点。熊本は細いボール廻しからチャンスをうかがったが力足らず。

和洋女高 9（4―4、5―2）6 小松市女高（石川）

後半終了直前まで、シーソーゲーム。終了5分前から秋田は速攻で3点連取し試合は決った。

精華女高 10（5―6、4―3、1―0、0―0）9 高蔵女子商高（愛知）

精華はセットからのロング、高蔵はカットからの速攻と持ち味を出したが、僅かに精華が勝った。

大分東高 6（2―1、4―1）2 福島女子高

速攻のない試合。後半走りの出た大分の順当勝ち。

高崎市女高 16（7―1、9―1）2 浜田水産高（島根）

総合力に大きな差のある両チーム。浜田は大敗した。

三本松高 7（5―3、2―3）6 八郷高

三本松は前半終了直前にあげた2点を良く守り切った。

大谷高 6（3―2、3―1）3 福井商高

スピードある攻防が展開されたが、相手ミスを得点に結びつける回数の多かった大谷の勝利。

新居浜市商（愛媛）6（3―2、2―3、1―0、0―0）5 花巻南高

本大会屈指の好ゲーム。新居浜はスピードある速攻、ポストプレーを展開し、すぐれたパスワークで前半は3点。花巻は7MTの2点。後半新居浜の再三の速攻も花巻のGK安藤の美技に阻まれた。一方花巻は高橋のシュートが決り同点で延長。新居浜は巧みなパスワークからの金村のミドルを決勝点とした。両チームのGKの好守新居浜のスピード、花巻の豪快さすばらしいゲームであった。

▽三回戦

室蘭商高 8（4―3、4―2）5 高岡女高

前半はシーソーゲーム。後半勝をあせる高岡がミスをおかし、室蘭ペースのゲームになった。

栃木女高 12（6―2、6―1）3 甲子園学院

4―2ディフェンスからの速攻この栃木ペースで試合は終始した栃木の巧さが目立った一戦。

小平高 7（5―4、2―2）6 前橋市女高

小平のスタートの2点が大きかった。前橋は良く追ったが常に先手をとられ、降雨があったことも手伝いあせりから敗れた。

小禄高 11（4―2、7―3）5 平塚江南高

平塚の守備のまずさとスタミナ不足が敗因、これをついた小禄の順当勝ち、小禄は沖縄チームとして初めての準々決勝進出を決めた

和田和洋女高 7（3―3、4―3）6 広島一女高

ポストプレーを中心にした両チーム。終了30秒前の鎌田の得点が決勝点になった。

大分東高 14（4―1、10―3）4 精華女高

大分は特に後半GKからの球出しが良く、これが速攻に結びついて大勝した。

高崎市女高 3（3―0、0―0）0 三本松高

高崎は前半にあげた3点を後半の雨中戦の間も守りきった。

新居浜市商 6（5―2、1―1）3 大谷高

降雨後の試合。新居浜前半は金村の活躍で5点をあげ、そのまま押しきる。

▽準々決勝

栃木女高 10（5―4、5―5）9 室蘭商高

得	【栃木】		【室蘭】	得
0	落合	GK	久保	0
0	小沼			
2	若葉	FP	藤浪	5
3	町田	（審・穴戸・島田）	後藤	1
1	大塚		小川	3
0	森川		菊地	0
0	稲葉		蘇田	0
4	高岡		山口	0
0	管沼		高橋	0
0	内海		荒木	0
0	関口		善陸	0
0	谷中田		小林	0
10	(1)	7MT	(3)	9

室蘭は前夜、家族に不幸があり帰郷したGK飛沢を欠いての一戦選手の腕にまかれた喪章が痛々しい。室蘭は栃木の守備の固さがなかなか破れずに苦労した。一方栃木は高岡を中心にした速攻、町田にうたせるフリースローで得点を重ね1点リードした。後半は栃木が滑り出しよく高岡の3点連取で4点差、室蘭も粘り藤浪の7MT、小川のミドルで15分にはタイにこぎつけ、追いあげムード。そのあと二度の得点チャンスをむだにし、栃木大塚のサイドシュートがタイムアップ寸前に決った。好試合であった。

小平高 11（9―5、2―4）9 小禄高

得	【小平】		【小禄】	得
0	佐藤	GK	宮城	0
0	丸山		新垣	0
0	瀬田	FP	玉城	0
2	鈴木	（審・熊田・村上）	田盛	2
0	小柴		南風原	5
1	坂本		具志	0
0	加納		金城	0
7	謝花		松田	0
1	平石		前城	2
0	石渡		小波津	0
0	川端		安谷屋	0
0	粟田		松田	0
11	(3)	7MT	(3)	9

小平は速いパスからのポスト、小禄は南風原・前城のコンビプレー。小平は良く走り4点リードで前半終了。後半は小禄のペースだったが及ばなかった。両チームともシュート力の強化が必要である。

和洋女高 8（4―1、4―1）2 大分東高

得	【大分】		【和洋】	得
0	高橋	GK	石塚	0
0	藤野		舟山	0
1	安部	FP	伊藤	1
0	市原	（審・千野・佐分）	鈴木	2
1	三宮		秋元	2
0	岩崎		鎌田	3
0	友永		松岡	0
0	斎藤		高瀬	0
0	御手洗		石郷岡	0
0	登根		菊地	0
0	三代		尾形	0
0	河上		堀井	0
2	(1)		(1)	8

スタートで大分の守備にとまどった秋田もしだいに調子をあげて確実に加点、楽勝した。

新居浜市商高 12（4―1、8―4）5 高崎市女高

得	【新浜】		【高崎】	得
0	岩崎	GK	佐藤	0
0	伊藤		柴山	1
0	磯部	FP	越野	0
1	曽我部	（審・清水・斎藤）	山田富	0
2	大塚		山田文	1
0	田中		吉井	0
6	金村		落合	3
1	出雲		岩井	0
2	森実		島崎	0
0	飯尾		川端	0
0	林		田胡	0
0	鈴木		島津	0
12	(2)		(2)	5

新居浜は終始走りまくり、多彩な攻撃を見せるとともに、守ってはGKの好守、好配球があり、申し分のない勝ちぶり。

和洋女、1点差に泣く

▽同準決勝

新居浜市商 8（4―4、4―3）7 秋田和洋

得	【新商】		【和洋】	得
0	岩崎	GK	石塚	0
1	磯部	FP	伊藤	0
0	曽我部	（審・島田・穴戸）	鈴木	5
1	大塚		秋元	0
0	田中		鎌田	0
4	金村		松岡	2
1	出雲		高瀬	0
1	森実		石郷岡	0
0	飯尾		菊地	0
0	林			
0	鈴木			
8	(1)	7MT	(2)	7

新居浜は早いボール廻しから巧く得点機をつかんで10分2―0とリードしたが、和洋もよく盛り返し13分2―2。その後は一進一退の好ゲームになった。

勝負をかけた後半、和洋は30秒松岡のゲットで初めて先行したが新居浜は相手パスをカットして速攻、6、9分のゴールで再び逆転しかし和洋も鈴木の連続得点で三転しコートサイドを湧かせた。新居浜は13分エース金村のゲットで追いつき、15分出雲が押しこんでこれが勝負を決めた。

両GKの美技の応酬を盛りこんで動きの早い展開に終始。熱気にあふれたいい試合だった。

栃木女、小平に圧勝

栃木女 12（6―1、6―2）3 小平

得	【栃木】		【小平】	得
0	落合	GK	佐藤	0
0	小沼			
0	若葉	FP	瀬田	0
1	町田	（審・清水・斎藤）	鈴木	1
2	大塚		小柴	1
0	森川		坂本	0
0	稲葉		加納	0
7	高岡		謝花	1
1	菅沼		平石	0
0	内海		石渡	0
1	関口		川端	0
0	谷中田		粟田	0
12	(0)	7MT	(0)	3

栃木の速攻、小平の遅攻と対照的な試合運び。栃木は5分、6分高岡のミドルで先行、7分にも大塚がゴールして早くも主導権を握った。

小平はドリブルで攻めこみポストからチャンスを狙ったが15分1点を返したに留った。

後半に入っても栃木は走力を活かし、サイド、中央から多彩な攻撃を実らせ、一方的な試合となった。小平はゆっくりとしたペースに相手を引きこめなかったのが敗因だ。

新居浜商、終盤一気に得点

▽同決勝

新居浜市商 10（4―2、6―2）4 栃木女

得	【新商】		【栃木】	得
0	岩崎	GK	落合	0
0	磯部	FP	若葉	0
2	曽我部	（審・岡前・中沢）	町田	0
1	大塚		大塚	0
3	田中		森川	0
3	金村		稲葉	0
1	出雲		高岡	4
10	(0)	7MT	(1)	4

新居浜は大塚が栃木のディフェンスに割って入ったあと、後陣の金村、曽我部らにボールを集める策戦が活き1―1から連続3ゴール、12分には4―1とリードした。

守っても新居浜は粘りのあるプレーで栃木女の攻撃をおさえ、特に強肩高岡をサイドに追いこんでそのシュート力を封じたのは巧かった。途中からはげしくなった雨足に前半15分から後半10分まではともに鋭い動きはみられなかったが終盤は再び活気のある展開となり余裕を持つ新居浜は積極的なボールカットから速攻を実らせ15分7―4から一気に3点を加えて初優勝を決めた。

栃木女は前半の終り、反撃にでかかったところで雨にみまわれて気勢をそがれたのは不運といえるが、新居浜のコンビのとれたディフェンスに攻撃の芽を次々とつぶされてはこの敗退もしかたなかった。

真木崇・新居浜商監督の話　去年1・2年生を多く使って決勝まで進み自信をつけた。その若い力がことしの戦力になったのが勝因だ。これといった選手はいないが石にかじりついても勝つという精神的なものは他のチームに負けないつもりだ。夏場の連戦ということでスタミナの点を鍛えたこともよかったと思う。

球界パトロール

炎天下のインター・ハイに拾う

富岡市（群馬）

手に"無欲"の二字

○…女子で初優勝の新居浜市商（愛媛）。試合が終るとどの選手の手も墨がにじんでまっ黒になっている。県大会、全国大会を問わず決勝戦へ進むと必ず掌に「無欲」と書いて臨むのだという。その信念が勝利を呼んで初の栄冠を得たわけだが、まっ黒な手で嬉し涙をぬぐう選手の姿は印象的だった

町田親子、決勝進出成らず

○…球界もそろそろ二代目時代各地で"蛙の子"がデビューしているが、今大会の話題をさらったのは富岡高・町田歳雄、桐生工・町田辰郎の親子監督だ。ともに富岡高―日体大を経て郷里に奉職、ハンドボールに情熱を注いでいる両校とも勝運にのって準決勝まで勝ち進みあるいは決勝で対決と地元ファンを喜ばせたのだがこれは"夢"に終ってしまった。

有力選手に勧誘の手

○…「君は進学、就職？」「…」「進学ならウチをうけてみないか」――めぼしい選手を勧誘する東西の大学マネジャーの姿は今年もかなりの数。七つの大学から誘いをうけた選手もいるとかだがあるマネジャーは『最近はスポーツ選手だからといって特典はないし、それに実業団のスカウト攻勢もはげしいので…』と炎天下にあまり晴々した表情ではなかった。

抽せんに天の味方？

○…男子富岡高は苦戦をしながらも勝ち続け地元は大喜び。同校の試合になるとグランドの周りには三重、四重の人垣、教室の窓や校舎の屋上にも鈴なりの人、人、人

3回戦東京の神代高との一戦は延長戦の上、また同点、抽せんになった。一瞬グランドは人っ子一人いないような静寂さに包まれたその時グランドの隅の大樹の上に雷光がひらめき、「富岡高が勝ったのが判った」とは教育長さんの言葉。事実、その直後に、岡前主審の手からひいたくじは富岡の勝ちを告げていた。まさに神がかりの地元の声援である。

女子高校生が特別奉仕

○…グランドの角では、富岡東高校の女生徒たちが自らのアルバイト（廃品回収など）によって得た数万円をもとに氷水、レモンなどを選手役員にサービス。選手団から感謝されていた。町ぐるみの協力ぶり声援ぶりは国体以上との評判が高かった。

20周年に感がいひとしほ

○…会場の一角で高体連20周年を記念して展示会が開かれた。外国チームのペナントや試合写真、本誌全号などが並べられ若い選手やファンの興味を誘ったが、一きわ感がい深そうなのは役員たち。「もう20年たったのだなあ…」―インターハイは日本ハンドボール界のふるさとである。

朝鮮大附、鮮やかな先制攻撃

▼第1戦（8月18日午後5時22分開始、観衆一千五百）

朝鮮大附属（韓） 11（5―3／6―4）7 中央大附属（日・東京）

○……朝大附の立ちあがりはあざやかだった。2分秋からの好パスを高が決めて先制、5分には安の空間パスを趙がみごとにジャンプショット、6分インターセプトから高が独走ゲット、10分には李（旺）が速攻でゴール、4―0だ。

緊張気味の中大附は、いきなり攻め立てられてすっかりペースを乱し10分佐野が1点を返しただけ再三の得点機も単調なシュートでつぶしてしまった。10分以後朝大附の変化攻撃を巧く封じて追加点をなかなか与えていなかっただけに、この間の凡攻は惜しまれる。23分榎本、24分今関が相手のマークをかわしてようやく1点差としたがハーフタイム直前、安のミドルを許したのも拙かった。

○……後半6―3から中大附は佐野の連続得点で1点差に追いこみ場内を湧かせた。しかし朝大附も気合いの入った守りで試合の主導権までは渡さず、特にGK姜のカンのよい動きは目立った。8分7―6から朝大附は空間パスを受けた李（旺）が体をひねりながらゲット。この好プレーに再び攻撃も勢づいて16分には10―6と点差をあけた。

○……必死の反撃を試みる中大附は17分からマン・ツウ・マンによるオールコートアタックという思い切った策に出てエキサイトした展開となったが、23分高にゴールを許して傷口を拡げ、24分松下のゲットで1点を返したにとどまった。朝大附は38年来日の韓国選抜よりもスケールは小さいが、基本に忠実で、特に守りの強さが印象的だ。また再三成功させたエリア内の浮き球による攻撃もタイミングとシューターのジャンプ力がすばらしい。（杉山）

李載鍋朝大附高監督の話 食事のちがいから体調はあまりよくなかった。中大附のオールコートアタックも韓国でよく経験しているので驚かなかった。審判も公平で申し分はないが、コートが固いので選手たちは思い切ったプレーができなかったようだ。

【中大】	得		【朝大】	得
吉近	0	GK	姜義善	0
上村	1	FP	高泰玉	3
佐野	3		李旺宰	4
松下	1		全鶴喆	0
榎本	1		安貞煥	1
古畑	0		秋章云	1
今関	1		趙判用	2
			李佑春	0
			宜鍾喆	0

（審・岡村、岡前）

11（0）7MT（0）7

第3回日韓高校ハンドボールは第2回日韓高校交歓スポーツ競技会の一つとして8月18、19日東京駒沢体育館に韓国高校選手権優勝校・朝鮮大附属高を迎えて行われ日本側の1敗1分となった。（総評など次号）

下関中央工、引き分けに終る

▼第2戦（8月19日午後2時7分開始、観衆一千）

朝鮮大附属（韓） 8（3―5／5―3）8 下関中央工（日・山口）

引き分け

○……残り時間19分で7―3、誰もが下関中央工の有利を予想しただろう。しかしその後に見せた朝大附の執念に満ちた反撃はすさまじかった。後半8分の7MTを安が決めたのが口火となり10分シュートのリバウンドを全がすばやく拾ってゲット、焦りのみえた下関から13分にも7MTを誘って安がゴール、1点差だ。下関は15分速攻から古谷が10分ぶりにゲットして8―6。ペースを取り戻したかに見えたが朝大附の粘りはおとろえない。

○……スタンドに陣取る女子バレーボールチームの大声援にいっそう元気づけられたように20分安が右45度からロングシュート、12分下関の横パスを李（旺）がインターセプトから一気に独走して遂に同点（8―8）にこぎつけた。

勝負は残り4分間にかかったがさすがに両チームとも緊張。

朝大附は、1分28秒間に亘ってローリングを行い「ストーリング」を宣せられた。しかし下関も24分中央からの古谷のミドルシュートがはずれ引き分けに終った。

○……前半の下関は開始30秒古谷のミドルで先制、2分1点を返されたものの8分中野、9、10分には皆本が鋭い動きから鮮やかなポストプレーで15分には5―2と点差をあけた。

朝大附得意の空間パスによるとびこみシュートに対してもパス筋を読んだ固い守りで防ぎ好調な試合ぶりだった。ところが前半終り頃からミスプレーが目立ち追加点があげられず、守っても痛いところで7MTをとられるなど朝大附の追撃を許してしまった。

日韓NO・1の対決にしてはスピード感に乏しく物足りない内容の試合だったが、リードマン趙をはじめ「なんとしても勝とう」とする朝大附の勝利に対する執着心は日本チームも学ばねばならぬのではないだろうか。（杉山）

槇敏夫下関中央工監督の話 去年ソウルで対戦した時より朝大附高は強くなっている。特にディフェンスがいい。中大附高が負けているので今日はどうしても勝ちたかったがミスが多すぎた。

【下関】	得		【朝大】	得
山徳	0	GK	姜義善	0
古谷	3	FP	高泰玉	0
西島	0		李旺宰	3
中川	1		全鶴喆	1
中野	1		安貞煥	4
酒井	0		秋章云	0
皆本	3		趙判用	0
田中	0		李昌秀	0
			金椿	0

（審・岡前、佐野）

8（3）7MT（1）8

東京教員が初優勝遂ぐ

全日本教職員選手権

第12回全日本教職員選手権は8月15日から3日間、埼玉県の上尾体育館に初参加の沖縄をふくむ28チームが参加して行われた。

優勝争いは予想どおり、2連勝を狙う埼玉教員を準々決勝で降した新進・東京教員クが決勝でも名門・大阪イーグルスを巧く制して勝ち初出場で優勝を飾った。

なお、1回戦の敗者によるトーナメントは福井教員が勝った。

福井、東京と大接戦

▽1回戦

宮城教員団 35（18 71／8 10）18 佐賀教員

愛知教員 34（16 18／5 5）10 神奈川教員団

静岡教員団 30（19 11／8 7）15 大阪教員ク

長崎県教員 32（14 18／6 11）17 千葉教職員

東京教員 21（13 8／11 9）20 福井教員

岩手教員ク 27（15 12／11 12）23 和歌山教職員

岐阜教員 32（17 15／10 8）18 群馬教員

三重教員団 28（11 17／9 13）22 長野教員

愛媛教員 31（16 15／12 8）20 滋賀教員

大分教員団 29（15 14／9 7）16 山梨教員ク

熊本教員 35（17 18／9 14）23 茨城教員

沖縄教員 22（11 11／9 11）20 栃木教員

強豪、順当に勝ち進む

▽2回戦

埼玉教員ク 37（19 18／2 4）6 宮城教員団

東京教員 17（7 10／4 4）8 静岡教員団

岐阜教員 21（14 7／8 7）15 愛媛教員

スワロー兵庫 33（15 18／13 2）15 熊本教員

岩手教員ク 19（9 10／11 1）12 長崎県教員

愛知教員 18（10 8／11 5）16 福岡教員

大分教員団 28（14 14／7 6）13 三重教員団

大阪イーグルス 27（17 10／4 3）7 沖縄教員

埼玉、東京に逆転負け

▽準々決勝

東京教員 17（10 7／5 8）13 埼玉教員ク

岩手教員ク 21（5 1 … 7 8／1 2 … 6 9）18 愛知教員

スワロー兵庫 20（10 10／6 7）13 岐阜教員

大阪イーグルス 27（15 12／10 8）18 大分教員団

スワロー!兵庫善戦空し

▽準決勝

東京教員 16（8 8／7 7）14 スワロー兵庫

大阪イーグルス 20（7 13／6 5）11 岩手教員ク

▽3位決定戦

岩手教員ク 25（12 13／8 11）19 スワロー兵庫

▽決勝

東京教員 20（11 9／10 7）17 大阪イーグルス

○……優勝した東京教員は若い有力選手を揃え苦戦をつづけながらも尻上がりに調子の波にのって優勝を遂げた。

有力チームのひしめくブロックを抽いた東京は、緒戦からもつれた試合を演じ、しかもチームとしての練習不足からチームプレーが整わなかったが個人技による得点を巧く守り切って勝ち進んだ。

○……ヤマ場とみられた埼玉戦を逆転勝ちで飾ったあとは、いちだんと攻防の迫力が増しベテラン揃いのスワロー兵庫、大阪イーグルスら強豪を次々となぎ倒しての優勝はみごとだった。

主力選手に大学勤務者が多く国体出場をあきらめたのは惜しいが今回の活躍は賞されよう。

○……連勝を狙った埼玉は、北井（全日本）の復帰はあったものの松田選手の事故死（本誌39頁参照）というアクシデントがあり、持ち駒不足から東京に逆転勝ちを許した。大阪イーグルスはいちぢほどの鋭さは感じられなかったが相変らず試合運びは巧い。

○……このほかスワロー兵庫が2年連続ベスト4となり、来年に国体を控えた岩手の3位進出も目立つ。

長崎、愛媛、愛知の充実も注目してよいものがあり、初出場の沖縄が栃木を13度同点という大接戦の末降して2回戦へ出たのも特筆してよいだろう。惜しまれるのは福井だ。最上位の力を備えながら緒戦で東京に1点差で敗れたのは不運というよりほかはない。

年次優勝チーム

回	年	チーム
①	昭33	茨城教員ク
②	昭34	東京教員団
③	昭35	神戸ストーク
④	昭36	休会
⑤	昭37	大阪教員ク
⑥	昭38	大阪教員団
⑦	昭39	大阪イーグルス
⑧	昭40	大阪イーグルス
⑨	昭41	大阪イーグルス
⑩	昭42	大阪イーグルス
⑪	昭43	埼玉教員
⑫	昭44	東京教員ク

山田計氏らを表彰

高体連20周年記念式

高体連ハンドボール部では創立20周年を記念して8月1日インターハイの開かれた富岡市で数々の記念行事を盛大に行ったが、これまで発展に功績のあった関係者に感謝状・表彰状を贈りまた男女16校を表彰した。

▽感謝状贈呈者　山田計（前高体連ハンドボール部副部長）、明星ゴムKK、望月運動用品KK、ミカド商会、タチカラKK、モルテンゴム工業KK

新刊紹介 ―全国高体連ハンドボール20周年記念誌―

10周年（昭35）、15周年（昭39）につづいて3回目の記念誌

御祝儀原稿につづく「先輩より」「仲間たち」という特集がいい。

特にOBたちの寄稿は苦労ばなしの中に現状への批判がふくまれ興味深い。

巻末の「高体連ハンドボール選手の体力調査報告」はかなり示唆的で、技術の背景に体力があることを再認識させよう。昨今の高校チームがいささか技巧に走り勝ちということは各所で云われているだけにタイムリーな発表である。また、ナショナルチームへの関連というものが打ち出されているのも特色といえる。〝高校ハンドボール部に体格、体力の大きな選手があらわれない限り日本を代表するナショナルチームは大型化し得ないと考える〞（187頁）というのは、高校界と日本ハンドボール界の密接なつながりを一言で表現している。このほかの頁は貴重な資料で埋められた。

A5判、190頁、非売品。

夏の全日本選手権回顧

第21回全日本総合選手権

箱崎敬吉（副審判長）

5日間にわたった大会は明年の岩手国体を意識した運営、記録速報、輸送、接待など細部にわたつて行きとどいた配慮で万事がそつなく進められた。とくに競技場の整備は最高で「軟弱でもなく堅くもない。走りよいからスピードも出る。庭球コートのようなすばらしい競技場である」と好評をはくした。

競技面では「世界雄飛」をかけて欧州遠征した全日本男子ナショナルチームが、当初決定した国内公式試合不出場の規制を破棄し、急きょ原隊に復帰して参加するという協会側の異例措置に対して、監督会議の席上で紛糾するという一幕があつた。今後の問題として検討を要するであろう。男子は、各部門の推せんやブロックの代表で、一回戦から熱の入った好試合が展開され、ベスト・フォアには協会推せんの全立教大、大崎電気、日本体育大と常盤工業を延長戦で破った芝浦工大が、それぞれ順当に勝ち進んだ。四強の対戦では、欧州帰りの選手がいかなるプレーを披露するかに期待の目が向けられた。とくにナショナルチームのメンバーで固めた大崎電気の戦法や個人技に注目されたが、対日本体育大戦ではラフ・プレーが多く、両チームに「注意」「退場」が続出したのは期待外れであった。日体大は、早い動きで再三再四チャンスをつかんだが、7メートルスローの失敗や、ノーマークのシュートミスで明暗を分けたものといえよう

全立大対大崎電気の決勝戦は、前半大崎が優位にたったが、後半に入って大崎のセット攻撃がほとんど正面だけで、個人技による単発シュートが多いのを見抜いた全

第20回全日本高校選手権

町田歳雄（競技副委員長）

本年は全国高体連ハンドボール部の20周年記念に当り亦ミュンヘンオリンピックにもつながる高校生大会とあって参加選手全員ははげしい斗志と盛り上がりを見せた大会期間中3日目（4日）に豆台風の襲来があったが午前中の競技を午後に延ばすことによって当日の日程を消化したほかは天候に恵まれ予定の競技日程を順調に終ることが出来たことは運営上まことに幸せであった。

しかも期間中は比較的雲が多かった為選手のコンディション作りには都合よく、各選手とも夏の大会としては最適の状態で試合に臨め自己の持てる力全部を発揮して思う存分奮斗し随所で好プレー、好ゲームが展開される結果となり、内容の充実した大会であった事は大変喜ばしい限りであった。

さて競技は男子に於ては決勝が期せずして昨年と同様下関中央工（山口）と中大附属（東京）との対戦となり結局は大熱戦の末中大附属の奮斗も空しく下関中央工の連続優勝となった。下関中央工の多彩な攻撃力と自信に満ちたプレー振り、更には試合マナー等は模範的であったと同時に、鉄壁の防禦陣をほこる下関陣を打破ることが出来なかったとはいえ中大附属の速攻を武器とする攻撃、ポストプレー、懸命に追いあげたあの執念の試合振り等は立派であったといえよう。

次に地元チームの富岡、桐生工がよく強敵を次々と打破って準決勝まで進出し3位に入賞した事は今大会を盛り上げる上に大きな効果があった。地元チームなるが故に連日大観衆の動員が出来、熱気あふれる会場の雰囲

第12回全日本教職員選手権

片瀬喜代次（競技委員長）

今大会は28チームと大会創始以来最多数の参加を得て盛大に開催されました。結果は新生チーム東京教員が、1回戦に福井教員に1点差で勝ち進み、2回戦静岡教員団との対戦で好調の波にのり、準々決勝戦の昨年度優勝チーム・埼玉教員には逆転勝、準決勝では俊足ぞろいのスワロー兵庫を2点差で降して勝負強いところを発揮、決勝戦は強豪大阪イーグルスと息ずまる熱戦を展開した末初優勝を獲得した。また本大会の敗者によるトーナメントでは奇しくも優勝した東京教員に1点差で破れた福井教員が1位となり埼玉県協会理事長杯を獲得しました

競技場になった上尾運動場公園体育館は、埼玉国体の主競技場と隣接しており、38m×20mコートが2面とれる立派な体育館でした。コートとコートの間に記録席を設置したので競技運営が大変スムーズに行なわれましたしかし体育館は光線の都合で締切ってある為め、8月中旬の猛暑の折で35度までに上昇し、選手は勿論審判員も大変なことでした。観戦しているだけで汗がでるのに、走り投げるのですから大変です。

競技の内容は山田計教職員連盟理事長（大会委員長）が監督主将会議での挨拶で「ハンドボール界の指導者による本大会は、全ての面で他の競技大会の模範となるよう努力してほしい」の言葉どおり、過去に見られた勝負だけにこだわるような言動が全く無く、終始和気靄々のうちに各チームとも自己のもてる実力を充分発揮し、なおかつ技術を研究する態度が随所にみられたことは実に立派だったと思います。その実証される事項として競技中

立大は、思い切った3・3のディフェンスで中央攻撃をくいとめ逆に攻めてはオープンに展開し、早い連けいプレーで確実にゴールを決めて逆転した。緩急のゲーム展開力にプラスして勝利に対する執念をみせた全立大のよさだけが目立った決勝戦であった。

女子は4チームずつ4ブロックの予選リーグを行なったが、Aブロックは大洋デパート、Bブロックは田村紡績の激しい反撃を振り切った美和クラブ、Cブロックは大崎電気、Dブロックは三菱鉛筆がそれぞれ勝ち進み、大学チームが全部姿を消したのはさびしい。決勝トーナメントでは総合力にまさる大洋デパートが、三菱鉛筆の善戦にあって苦しんだが、後半一気に差をつけて快勝し決勝戦では、大崎の単調な攻めをおさえ、逆にすばらしい出足と得点力で、前半早くも大きく水をあけて試合を決め、抜群の力で優勝を飾ったのは立派であった。

全立大、大洋デパートとも昨年に続く連続優勝で、日頃の精進に敬意を表するものである。

【写真は女子準決勝大洋デパート対三菱鉛筆、大洋・米のシュート（岩手日報提供）】

気を招来したといえる。この外ベスト8に進出した枚方（大阪）新居浜工（愛媛）中京（愛知）佐世保北（長崎）等の健斗が光り、尚これまでに不運にして敗れ去った添上（奈良）神代（東京）マリスト学園（熊本）清水市商（静岡）古川工（宮城）等の活躍も目立っていた。

一方女子の競技は決勝では新居浜商(愛媛)と栃木女とが覇権を争うことになったが両チーム共体力、気力をあげ、この斗いで激しいもみ合いが続いたが結局新居浜の試合運び及びスピードと体力に一日の長があって栃木女の敗退となった。決勝における栃木女の全得点は高岡によってたたき出された事を考えるとき彼女の活躍は賞讃に価しよう。秋田和洋女が持前の技術と体力を生かして伝統の名にはじす準決勝に進出、小平（東京）も小粒ながらキビキビとした早い動きでベスト4に勝ち残ったのもみごとだった。ベスト8に躍り出た室蘭商（北海道）、小禄（沖縄）、大分東（大分）、高崎市女（群馬）、の健斗とその前に敗れ去ったとはいえ高岡女（富山）、広島第一女、花巻南（岩手）、前橋市女（群馬）等の活躍も目立っていた。

男女共に記した以外のチームといえども僅少の差で敗退して居るケースが殆どである実態を見る時、地域差は益々せばまり、伝統を生かしながらも実力の差は次第に縮少されつつある感がしてハンドボール界発展のために大いに意義あることというべきであろう。

以上の如く大会をふり返って見て参加各選手が母校の名誉と郷土の栄光の為に力の限り斗ったあの真けんな態度は高校生大会の本領を遺憾なく発揮し、公正、斗志、友情に徹した強くたくましい姿は明日の日本を象徴する若人として頼母しい限りであると痛感した。

最後に大会運営に関係され細部に指導下さいまして役員の方々および連日試合審判に当たられた審判員の皆様コート整備、記録など裏方として骨身惜しまず働いてくれた地元関係学校の御援助と御協力に深甚なる謝意を表しましてむすびとします。

に審判員より注意される選手はあったが退場させられる選手が非常に少なかったこと。競技上のトラブルが全々無く選手全員が競技運営に協力的であったことがあげられましよう。

本年四月に全日本教職員連盟が設立されブロック別に教職員チームの連携がとれた結果、佐賀、山梨、千葉が初出場し沖縄も参加するという好結果を生じ、また各チームとも若い優秀な選手を多数補強し多忙の中でも練習を重ね、競技力の向上に非常な努力している結果が試合の内容にあらわれておりました。

教職員連盟の設立の主旨の中に、学術調査並びに研究に努力するという事項があります。

今回は本大会の前日、本連盟と日本体育大学の主催で講師に東京大学教授神田順次、広田公一両先生をお招きして、「ハンドボール競技研修会」を開催しました。そして貴重な研究発表があり、それに対する討論がなされました。つづいて、全日本ナショナルチームのルーマニア合宿報告、日本体育大学の韓国遠征報告、国際審判講習会報告がありました。また開会式の後で全日本ナショナルチームの全員による公開演技が村田監督の解説で実施され、ルーマニアに於ける強化合宿そして欧州遠征に於いて経験した貴重な技術を披露してくれました。大会参加者にとってはこの上ない土産物になったと思います2日目には公認審判員研修会が開催され、山田理事長より「国際審判講習会で統一した事項」として今後我が国のハンドボール競技規則の面で変わってゆくであろう事項について説明があり、これまた実に有意義なものでした

このようにして本大会は教職員連盟が結成されて始めての大会でしたが、今までにない数々の新しい試みを立派に消化し、指導者による大会にふさわしい有意義な大会として盛会裡に終了できました。最後に地元埼玉教員の選手諸君が競技をしながら、役員選手の輸送、接待等大会運営に協力いただいた事、また富岡インターハイ、盛岡全日本総合とつづいて、本大会に参加いただいた選手並びに役員の皆様方に心から感謝する次第です。

甲子園大、圧倒の攻撃力

関西女子学生結成大会開く

結成が待望されていた関西女子学生リーグが今秋から正式に発足することになり、関西学連では7月19、20日の両日大阪体大球技場で「結成記念大会」を開いた。

参加したのは昨年からすでに活動をつづけている大阪体育大と大阪薬科大に、新発足の甲子園大、武庫川女大を加えた計4校。リーグ戦で6試合が行われた結果、元田村紡の吉開をはじめ中本、今井篠原、亀谷ら高校界の有力選手を集めた甲子園大が3試合で81点をあげる抜群の攻撃力を示し首位となった。

大阪体大 21（10－0 11－2）2 武庫川女大
甲子園大 35（21－2 14－0）2 大阪薬大
甲子園大 36（26－1 10－0）1 武庫川女大
大阪体大 35（17－1 18－0）1 大阪薬大
武庫川女大 19（12－2 7－0）2 大阪薬大
甲子園大 10（6－2 4－0）2 大阪体大

【順位】①甲子園大3戦全勝②大阪体大2勝1敗③武庫川大1勝2敗④大阪薬科大3敗

東北大が3連勝

国立大学リーグ

第13回国立8大学リーグは7月21日から24日まで北大球技場で行われた。東大と九州大が欠場、6大学によるリーグ戦の結果、東北大が東北北海道学生1位の地力を示して優勝、3連勝を飾った。

東北大 18－14 京　大
京　大 15－11 名古屋大
大阪大 31－18 北海道大
神戸大 18－15 名古屋大
東北大 29－16 神戸大
名古屋大 26－12 大阪大
京　大 21－15 北海道大
大阪大 14－14 神戸大
神戸大 20－15 北海道大
京　大 15－9 大阪大
東北大 18－14 名古屋大

【順位】①東北大②京大③名古屋大④神戸大⑤大阪大⑥北海道大

9月15日が〆切

全日本学生選手権

全日本学生連盟では11月26日から東京で開く全日本学生選手権の申込み〆切日が例年より早い9月15日となっているため加盟各校に間違いのないよう呼かけている。

学生東西対抗戦予想

（9月7日愛知県体育館）

【男子】過去の対戦成績は東軍の11勝7敗。東軍は最近4連勝しており、今年も優勢が伝えられているが、西軍は主体となるナンバーワン関大の充実で好試合が期待される。

連勝を狙う東軍（東北北海道、関東、北信越、東海）は、関東学生優勝の井上、谷藤、斎藤、大川、笠原、氷海ら日体大を中心に小野口（立教）、藤井（明治）鈴木（中京大）らテクニシャンと植木（中央）、門脇（東北学院）、石川（名大）、村沢（富山大）などの定評あるアタッカーを加えている。どの選手を組み合せてもスキのないチームを造ることができベンチの用兵もみもの。

西軍（関東、中四国、九州）はGK入江、FP馬着松田、許、西脇、宮松の関大勢に町田、中野（ともに同志社）、GK今井、FP水野脇田（以上大阪経大）、三国（桃山学院）が主力、中四国・九州代表のレベルも高いので久しぶりに層の厚い布陣だ。

試合の焦点は、例年のように東軍のクイックプレーと西軍のスローテンポなセットプレーにかかろう。

西軍新月監督が、スピードでのせりあいをさけ、自分のペースへ東軍を引きこむのにどのような策をとるか注目される。馬着、松田、水野らゲームメーカーの出来も一つのカギになってこよう。

しかし、東軍の大村（日体大）上野（東京教大）両GKの堅守と球出しの巧さは定評があり、俊敏な小野口、藤井、鈴木らへ一気につなぐプレーは威力がある。西軍ディフェンスが速い帰陣と粘りのあるプレーを忘れると一方的な経過になりかねない。

東軍が混成の欠点を露してテンポを崩さぬかぎり今年もその優位は動くまい。

【女子】今年から正式に発足、記念すべき第1戦だ。力のバランスを考えて東海が西軍に加わる。

主力となる東軍（関東）の日体大、東女体大、西軍（東海、関西）の中京大、甲子園大、大阪体大らの力を比べると東軍がリードしているようだ。しかし、男子以上にコンビネーションが左右するだけにもつれた展開になろう。実業団のレベルに一日でも早く追いつくために、このような大会を通して女子学生界の水準向上が果され、スピードと迫力に富んだプレーの応酬となることを期待したい。（S）

日体大韓国遠征日記（上）

北川勇喜
（日体大監督）

▽7月11日　午後4時大韓航空機羽田発。金浦空港まで2時間余、で安着して外を見ると「歓迎・日本体育大学」の旗がロビーいっぱいに拡がっていてさわやかな気分。空港から無名戦士の墓（国立墓地）に参いる。

宿泊所にあてられたのは泰陸選手訓練所。市内からバスで、40分の道程。丁度日本の青少年総合センター（オリンピック村）みたいな所だが、三万六千坪の広い土地に、宿泊施設・体育館・公認トラック、トレーニングセンター研究所、バスケットコート、テニスコートなどの施設があり、しかも、日本のように、修学旅行、企業研修会等の利用でスポーツ団体が締め出されているのとは違って、韓国では、スポーツ選手だけが利用するという、まったく羨やましい環境と待遇である。

▽7月12日　スポーツ村での最初の食事。一日四千カロリーの摂取量とのこと、ブタの肋骨のスープパン・牛乳、野菜サラダ、魚、キムチ（朝鮮漬）等、味の中国、見栄えの日本、量の韓国と云われるだけあって盛り沢山。

昼、鶏のカラ揚げ、ホウレン草いため、スープ、米飯、漬物、スイカとに角、量が多い。

午後2時出発。奨忠体育館で鳳永女商対聖満女商戦につづいて成均館大と第1戦。驚いたことは応援合戦の激しいこと。拍手、歓声、怒号……ゲームに影響しなければよいがと、少々心配する。

ホイッスルが鳴った。思惑通り数名の選手は、足が地に着かない。特に、シュートマシンの大男・斎藤がひどい。いろいろの手を使っても駄目である。このような時に、早く平常に戻させるのが、監督、コーチの手腕なのだが、この機に乗ぜられて4−0とリードされる。

10分を過ぎた頃、ようやく平静を取り戻し、鋭い速攻を織りまぜた多彩な攻撃で次々とポイントを上げる。特に左45度ラインのブロック・フェーク、トリックプレーが小気味よく決る。しかし、成均館大得意のスカイプレーに悩まされ、ポイントを許す。追いつ追われつのシーソゲーム。ようやく25分を過ぎて連続ゲットで逆転、11対8で前半終了。

ハーフタイムに相手のスカイプレーに対するシフトデフェンスを指示、オフェンスでは、コートが狭く、得意の速攻が出ないので、タテの動きを強調したセットを徹底させ後半に入った。しかしうまく指示通りにはいかず、組織の機能も発揮出来ない。それどころか、シュートミスで逆襲かけられることがく、折角のリードもタイにされる。こうなると相手は追う者の強味で、迫力のある攻撃でぐいぐい押して来る。一方、日体は、攻撃リズムを失い、なんとか糸口をつかもうと選手交替をさせるが一度リズムを失ったら、このようなムードの中では、取り返しがなかなかむずかしい。単調でしかも有機性のないバラバラな攻撃でポイントするのみ。

結局20分に逆転され、22分に2点差になる。相手はもう逃げの態勢、マンツーマンプレスデフェンスを指示。必死の攻防に万場の割れるような成均館への声援とベンチのヒステリックな声がとびかううちに試合終了。

日体大の選手もよくやったと思う。狭いコートに戸惑いホームデシジョンの簡に悩まされながらも全力を尽くしたのだ。夜、成均館大のレセプションに臨んだが、〝苦いビール〟だった。夜、くやしくて眠れず。

（つづく）

韓国学生と交流して

井上亮一

我々が初めて韓国学生と交流して一番感じたのは学生各人が最高学府に学んでいる事に誇りを思っている事である。

韓国では義務教育は小学校6年間だけであるが、貧富の差があり上級学校で学ぶ為には中流家庭の上の方でなければいけない状態である。それだけに彼らは真剣に学問を行っている。国が教育面では何よりも力を入れているので大学の大きさ美しさは素晴しいものであった。彼らは韓国に行くまでに聞いていった話よりも親密感があった。人なつきが早い。やはりスポーツをやっている者達の特徴であろう。日本に対する反感というものは全然みられなかった。中には考え日本に来て勉強したいとている者もいるし韓国の学生達は我々よりも大きな望みを持っている。

街を大きな声で話をしながら歩いて彼等の話を聞いていると試合で見せるファイト等は考えられないものがあった。

いざゲームになると人が変ったみたいにボールに対するアタックを見せるしディフェンスの当たりも素晴らしいというよりなかったボールゲームのセンス、ジャンプ力、手首の強さ等は今後の日本のハンドボール界に接近してくる力は大であると思われる。

短かい期間であったけれど韓国学生と交友して我々にない新しい何かを注入出来た事は我々にとっても素晴らしい事であった。

しかも日韓の大学交流が今年から再開された事は良い結果を招くことになるのではないか。彼等の良い点又彼等も我々の良い点等をお互いに吸収しあってこそ今後のハンドボールの発展につながるのではないでしょうか。十日間であったけれど有意義な遠征をできた事を嬉しく思います。

（日体大主将・4年）

全国スポーツ少年団大会指導報告………

高橋健夫
（日本協会技術委員）

第7回全国スポーツ少年団大会は7月26日から31日の6日間本栖湖畔のスポーツ少年団本部で開かれ期間中27日、28日、29日午前と5分画のスポーツ活動が行なわれた。

この大会に参加している少年団は、各都道府県の代表リーダーで団体生活をするとともに、スポーツ全般を経験し、指導の技術を身につけ、各地に帰つて一般団員を指導するという大きなねらいが含まれており、参加層は、小学校の6年生から、高等学校の3年生までという、かなり体力的にギャップのある年令層の集団となつている。

そのため、この指導には、かなりの難点がある。

また本年度は、参加少年団員の希望による種目の選択制をとつていた。ハンドボールは、ソフトボール、体操と3種目で1群が構成されていた。その為、指導効果もかなり期待することができた。

残念ながらハンドボールの普及度は極めて低く、今回の集団でも経験者数は、

27日午前　1/34　2%
　　午後　6/34　18%
28日午前　3/36　8%
　　午後　0/48　0%
29日午前　12/48　25%（女子）

となって、最後の女子のみやや多くなっていたか、全体では11%という普及度であった。

28日の午後は団員の疲労から移動中止の指令がでて、前にソフトボールを選択したグープの強制割当であったため、持別な集団であった。

ともあれ、与えられた条件は如何にせよ、われわれは、1人でも多くのハンドボール愛好者、理解者がふえてもらえるよう努力しなければならないとの観点にたって指導の計画、反省、実施につとめた

先づ過去の経験から、2時間半単位の展開計画の骨子を次のように立てた。

15分、導入、歴史、ルール、技術についての説明
60分、基本プレーの練習パス、キャッチ、ランニングパス、シュート2〜3人のフォーメイション、2：1、3：2の攻防
10分、休憩
60分、総合プレーの練習
　6：6の攻防、ハーフマッチゲーム

以下順を追って、指導の記録を報告してみたい。

27日午前　8時出発、50分のバス行程で、会場の北富士工高に着く。会場は、ゴールがグランドの隅に点在、野球のバックネットの支柱代りにつかわれている状態を見て、些か淋しさを覆えない感だった。

志気を鼓舞して、コート作り、団員とともにゴール運び、説明をして練習に入る。炎天と、はじめての活動で構成メンバー同志、顔もしらないとあって、はじめはあまり活発でなかったが、序々に調子があがりまとめのゲームには、1チーム1人宛の指導員がついたためもあり、僅か15分間のゲームではあったが、「面白いもんだ」という感想を聞くことができた。

27日午後　2時開始。この組は輸送バスの関係から6時までと4時間の活動が依頼されていたので時間的にも余祐をもつことができた。また団員も積極的なものが多く、ゲームもリーグ戦で、見学、批判、作戦などの機々を与えることができ、高度なプレーも見られるようになった。

翌日のディリー本栖（キャンプで発行されている機関紙）には次のような文がのっていた。ハンドボールここ第三会場（県立北富士工業高校）では、第7分団の団員がハンドボール、体操、ソフトボールーに汗を流していた。『ハンドボールはグランドで一、二、三班が基本運動の後、四チームに分かれて試合もした。初めのうちは、前日の疲れやら、慣れないために活気がなかったが、活動が進むにつれて、指導員の声援でリーダーたちもはりきっていた。

終了後、渋谷嘉一君（静岡）に聞いてみると、「僕はソフトボールをやりたかったが、ハンドボールもやりはじめるとだんだんおもしろくなった」と汗のにじんだ顔を上気させていた。』……

28日午前　練習の配分も、指導も軌道にのって順調に進む。

午後は、前述のようにソフトボールグループがそのまま移動してきたので、意欲の面からも人数の面からかなり指導にてこずる。幸いに分団の指導員が進んで協力してくれた為にゲームでは、まとまりをつけることができた。

29日午後　最後のスポーツ活動で、疲労がかなり強く、しかも女子。夜には富士登山という悪条件の中の展開だったので、導入に日大生の模範プレーを見せながらルール、技術練習の説明、この模範プレーが珍プレーとなる場があり団員の気持を引きつけるのに大いに役立ち、練習も能率的になったまた若い女性の指導員が、積極的にゲームに出場してくれ、楽しく有終の美を飾ることができた。

今後の課題として、このような多数の集団に於けるハンドボールの指導も充分考える必要があろう。つまり、速製の指導員グループでなく、意志疎通のある指導員グループの構成で、指導法の研究反省等一貫した指導性をもったものが必要ではないか。

（註）この大会へ日本協会は高橋健夫氏を指導主任に、補助員として日大ハンドボール部の今成豊、徳永昭威、飯泉保秀、井口行雄、萩原正芳の5君を派遣した。

全日本男子遠征報告 (1)

～ヨーロッパの2ケ月～

ミュンヘン・オリンピックにつながる第7回世界男子7人制選手権は来春2月26日からフランスで世界各地域の予選を勝ち抜いた16ケ国によって争われる。

アジア代表の日本は、この大会での上位入賞をめざして今年1月ナショナルチームを編成、数次の国内合宿を経て第2次候補17選手が去る5月14日から7月14日までルーマニアで強化合宿を行い、そのあとハンガリー、ユーゴ、西ドイツを転戦、いちだんとたくましさ、巧さを増し"世界"へ大きな期待をかけるまでに成長を示した。

本誌では遠征選手団から二ケ月に亘るヨーロッパでの生活を多角度から報告してもらい今月号から数回にわたって連載します。

ハンガリーのハンドボール

北井晴次（FP・埼玉教員ク）

今回の遠征中、ハンガリーナショナルチームとは三度対戦した。初戦はルーマニア合宿のあと体育館で24－23で日本、二回目はアスファルトコートの雨中戦13－20でハンガリー、三回目はタシマイダンで21－21の引分け。我々はハンガリーと対戦する前、三十数日間ルーマニアで合宿を行い、ルーマニアチームと約十四試合消化してからであり、一応ルーマニアのどのようなチームに対しても策戦的な攻防が身についた時期であったそれがハンガリーと対戦してみて一変してしまったのである。戦法というものはそれぞれ国柄が異れば違うのは当然であるが、ハンガリーはそれまでのルーマニアで対戦したどのチームにもないタイプであった。スコアでもわかるように三試合とも激しい点の取り合いに終始したのである。選手をみると非常に多種多彩で、バランスのとれたチームである。フェイントに秀い出た者、もちろん長身者もいる。全般的にはほっそりとしたスマートな選手が多いという印象である。

さてハンガリーはひと口に云えば攻撃のチームといえる。日本と対戦した時もそうであったが他の国と対戦しても彼等は必ず乱戦を展開した。オフェンスではルーマニアのような強烈な個人プレーからはじまってゆくローリングとは全くちがったチームオフェンスであった。従って、最初日本が対戦した時も日本はそれまで馴れたルーマニア的な戦法を仮想していたのであるが、彼等は全員でよく走り、非常に球ばなれのはやいローリングを展開した、日本はそのオフェンスに対するディフェンスを整える間もなくハンガリーペースのゲームをされてしまったのである。オフェンス隊形としてはワンポストがほとんどでフェイントの切れるプレイヤー、長身者のアンダーシュート、ポストマン、あるいは戦局をみる目にたけたベテランなどを中心に、スピーディな攻撃がくりひろげられる。

ディフェンスはどちらかというとルーマニアのような激しさ、しつようさはなく、たいてい一・五のディフェンスであり、長身者をトップへおいたことも特色であった。

はじめに述べたハンガリーは対戦するどのようなチームともせり合ったゲーム展開をしてしまうということは、結局オフェンスはするどいが、ディフェンスが甘いために起ってしまうのだと思う。

我々はルーマニアで力のハンドボール、特にディフェンスでもオフェンスでも、まず力というか強引というか、荒けずりとも云えるハンドボールを見てきたのでこのハンガリーを見た時、とてもきれいでスマートなハンドボールに映った。このきれいに映ったということは今になって考えるとディフェンスでのスマートさがこのように印象づけられたのだと思う。日本人からみると人間ばなれしているとも思えるプレーヤーの多い欧州チームの中でこのハンガリーはどちらかというと日本人的なプレーであった。ボールをもったフェイントにしてもほとんどが両手でボールをもったフェイントだし、フットワークも日本人のそれとほとんど同じタイプであった。

我々の見た中でチームワークの最もよかったチームの一つでもあった。

ユーゴでタスマイダン杯の終了した夜、おわかれのレセプションがすんで、我々はいよいよ明日西ドイツへ出発するという深夜、彼等は、大勢で我々の一部屋ごとをまわって来た。歌でおわかれのあいさつをうけた時、はじめはみんなどぎもを抜かれてしまった。このような型破りの行動も、知り合えば知り合うほどに親しさを増すハンガリー人としてとても気持のよい素晴しいものであった。

西ドイツのハンドボール

木野実（FP・ワクナガ薬品）

西独のハンドボールの感想といっても4試合だけで、的確なものがでるかどうかわかりませんが自分なりに感じてきましたものを報告させて載きます。日本は過去ドイツを目標に学び教わってきました。日本と西独は歴史的にも似ており、感情的にも非常な友好関係にあり我々としても素直に入れることが出来るのでした。今回は試合のみだけで練習方法、普段のトレーニング方法などに接する機会

はなかったのは残念だったが幸運にも西独ナショナチームとの対戦であらためて西独のハンドボールの教科書的なものにふれ感激しました。

　それはどの試合も無理なく、自分たちの持味を十分生かしており7人の組織的なプレーの組合せであってチームプレーに徹しているのです。チームプレーとは自己を殺して他人を生かす、そしてそれを他の人が積極的に生かしていくということが云えると思います。彼らは自分に与えられたポヂィションを確立し、忠実に責任のあるプレーをするのです。サイドポスト、フローターが自分の役割りをよく知っており、彼らは、それを行っているのです。

　攻撃は、フローターの8の字の施回、サイドとポストのチェンジサイドとフローターの施回、あざやかで流動的で、その流れの美しさにみとれてしまった。それを無理なく、何なくこなしていることは、シュートコースに結びつくよいポヂィションを早くみつけているといえる。我々は前に進むフットワークはうまく出来るが、次にボールがどの様に展開しているかの読みの深さ、それにつれてのポヂィションのという方に欠けているように思えると同時に前のフットワーク以上にうしろへのフットワークがまずいといえる。

　西独は決して無理なシュートはせず、少しのスキがあっても確実なところにボールをまわしチャンスをうかがい。ローリングから又ポストの動きを利用してロング、ミドルシュートに結びつけるという戦法です。自分で単独で強引にもっていく様なものではなく、必ず人の動きを利用し、自分も生きるという組織的なプレーであったシュート・パスにしてもいくら力があってもタイミングが重要である様に実にグッド・タイミングであった。テクニックもさることながら思ったより力強さがあった。特に手首で放つシュートは、G・Kの手前で鋭く伸びがあって威力は抜群であった。

　彼らのシュートは、バラエティにとんでおりステップからジャンプシュートへの切り換えジャンプしてから体を倒してのシュートなどディフェンスにとって実に防ぎにくいものだった。又シュートするとみせかけての手首をかえしてのポストへのパスも巧みであり、ディフェンスがすごく神経を使い果してしまうプレーにも2人、3人のコンビが髄所にみられ、多くは組織的なプレーで組みたてられており何度となく成功させられてしまった。3人のフローターとサイドとポストのチェンジがうまくかみ合って、ポストがダメなら45度の攻撃、45度のシュートがダメならポストの攻撃と自由自在、臨機応変に攻撃をかえてくるために重点を定めて防ぐことは難しく目まぐるしいばかりの変化に失点を重ねてしまった。

　それに、日本の選手とちがうことは、ボールをパスしてからの走りがすごくスピードがあり、その走りもフェントをかけて走るのでディフェンスにとって守りずらいものだった。我々も今後、一直線の走りだけでなく、蛇行ジクザグの走る練習も必要ではないかという気がする。片よった攻撃はなく欠点のみあたらないどこからでも攻撃出来るものを持っていた。速攻と遅攻をはっきり区別しており神風式に突進してくる様な効率の悪いゲーム運びはせずセットオフェンスでチャンスをみつけ、確実に得点していくといった攻撃をする。だからといって速攻はしないのではなく、帰陣が遅い時、又チャンスがあれば、大きなスライドで単独ドリブルで攻めてくる場合もあり、スピードが豊かです。その様な時は必ず得点する能力を備えていたようです。速攻からセットオフェンスの切り換えは、プレーが中断することなく常にゴールをうかがいながら休みなくつづくので防禦側は全く気が抜けない。西独と戦っていて我々は接戦していると自覚もつ。しかし終ってみて意外と点差があいていることに気づく、それは彼らのゲーム運びの巧さにしてやられてしまったからである。

　彼らは守備面では当りの激しさは、あまりみられなかったが攻撃しずらかった。G・Kと・ディフェンスのコンビの徹底さは強く、逆を打たれた場合はG・Kがかんかんになって守備者を叱るのであった。しかし防禦面で目についたのはフットワークのよさ。我々もルーマニアで一日中、フットワークの練習をしたことがあったが、背の低い我々は彼らと対抗するためには、素早く動ける守備範囲の広いフットワークが何よりも大事であり攻撃以上にボールカット、シュートカットの練習などもっと数多く練習を行われねばならないことを痛感した。

　ルーマニアの力のプレーに対しドイツの流れる様な動きの美しさそのマナーといい、チームプレーに徹していることは、ずい一であった。そして勝つためには基本であるパス、キャッチのミスは許されない。いくら強いチームでも、ミスがあっては、負けてしまうのだ。

　西独のプレーのように忠実に基本プレーを行ってこそ、その流動的な攻撃と力強い攻撃が出来、そして知識的なハンドボールが出来るのだと思う。

ハンガリー国の感想

有永修二
（FP・立教大3年）

我々は6月19日にルーマニアに別かれを告げてハンガリーに入った。そして6日間この国で過ごすことになった。最初の二日間は雨だったが、のこり四日間は大変よい天気になる。まずブダペストに二日とまる。初日は市内見物に行く。ドナウ川をはさむこの町は、向こう岸のブダと、こちら側のペストからなり我々はペストの側のホテルにとまる。ブダの方は大変古い教会や城などが多く、それとは逆にペストには国会議事堂などの建て物がならんでいて我々の目を楽のしませてくれた。この国はルーマニアにくらべると活気にあふれている様だし、ネオンもひときは鮮やかで物資も豊富な様な気がした。試合場も大変大きく四、五千人はかるく入りそうな屋外の板バリの会場だった、どのくらい入るかたのしみにしていたが、当日はあいにく雨のため体育館にうつる。それでも数千の観客が集つる。選手もやりがいがある。

21日ブダペストからペーチという所に試合のために移動、こちらでは二百キロぐらいの所は平気でバスで移動する、やはりなんとなくつかれて体がだるい。どこの町へ行ってもその土地の協会の方が市内見物につれて行って下さる。景色は美しいし、ものめずらしさも手伝だって写真をパチパチとるすこし撮りすぎのようだ。

24日にはハンガリーの小・中体連の開会式を見に行く。日本のインターハイくらいの規模で軍隊も来ているし、聖火までちゃんともしているなど本格的である。行進をしている子供もすごく小さいのから180センチぐらいあるのまでいておもしろい。

この国でもやはり日本よりもずっと体育の施設が整のっている。どこへ行っても日本の大学もしくはそれ以上の設備を持っているのには感心させられたし、うらやましく思った。

西ドイツでの民宿

早川清孝
（FP・ワクナガ薬品）

西ドイツ、ハンブルグ空港よりバスにて1時間30分程の所。ハスロフと言う街へ到着、街では市長を初め関係者多数の人の盛大な歓迎にあいました。

今回の長期間遠征で初めて日本の言葉で挨拶された事は非常になつかしく、嬉しい気持でいかに日本と西ドイツとが友好関係あるかがわかるような気がした。それが特に印象深く感じられた。

又大変驚いた事は選手団宿舎が各家庭における民宿と言う事で選手は途惑った感であった。

西ドイツでは民宿と言う事は最大の歓迎の意味を表すと言う事でしたが、選手団にとっては一人一人に別れる事が大変心細く不安な気持で、迎えに来ておられる各家庭の主人について行ったものだ。各家庭では又全員で歓迎してくれた事で不安な気持も少しは薄れた感である。最初に困った事は独語だけしか通用せず言葉で大変苦労したが家族の暖かい心使いで身振り手振り表情によってだいたいの事は理解する事が出来た。食事においても非常に親切でわざわざ米を買って来て御飯を食べさせていただいた。特に野菜（トマト、タマネギ、レタス）などは非常においしくいただく事が出来たのもその家の奥さんの細い心使いが切実に感じられた。

ハスロフにおけるわずかな日数ではありましたが、民宿と言う生活を送った事は大変意味深いものがあったと思われます。今回の長期間遠征において一生忘れる事のない最高の思い出となったのです。この計画をして下さった西ドイツのハスロフ市長を初め関係者・市民の皆様に対し心より感謝の意を表します。

今後も益々日本と西独とがスポーツにおいても又国と国との親善をも深めていけるものと確信致します。

遠征試合成績（全25戦）

太字はナショナルチーム

結果	得点	対戦相手	備考
△	16—16	ボインツア	
△	13—13	ガラミノ	
●	15—17	ポリテヒニカ	
○	22—16	テレメタール	
○	17—12	ロブリン	
○	19—17	ルゴシユ	
○	22—16	ボインツア	
●	3—5	スパルタク・ブダペスト（ハンガリー）	
○	25—21	トラクトール	
○	24—19	プロイエステ	
○	23—19	ブラショフ	
○	22—19	シビユ	
○	**15—13**	**ルーマニアB**	
○	**12—11**	**ルーマニアB**	
		（以上ルーマニア）	
○	**24—23**	**ハンガリー**	
●	**20—31**	**ハンガリー**	
○	30—27	コムロ	
		（以上ハンガリー）	
●	**13—30**	**ソビエト**	タシマイダン杯大会
○	**19—18**	**ユーゴ**	タシマイダン杯大会
●	**12—15**	**ルーマニア**	タシマイダン杯大会
△	**21—21**	**ハンガリー**	タシマイダン杯大会
		（以上ユーゴ）	
△	18—18	ハスロフ	
○	27—24	ラインハウゼン	
●	**16—24**	**西ドイツ**	
○	16—13	西ベルリン	
		（以上西ドイツ）	

通算15勝6敗4分
（内・対ナショナルチーム4勝4敗1分）

フランス転戦はとりやめ

全日本男子、当初の予定では西ドイツ転戦後フランスに立ち寄り親善試合を行う予定だったが同国ナショナルチームが「スペイントーナメント」に急きょ出場することになったため計画が中止された

第9回 タシマイダン杯大会回顧

村田　弘（全日本男子監督）

6月27日より開始された本大会は日本、ソ連、ルーマニア、ハンガリーと地元ユーゴスラビアの5ヶ国の参加で本年は前半戦3日間はユーゴの東北部にある材木の町ザビドビッチという町の75周年の記念事業として地元チームを入れ6チームで実施された。この町はハンドボールの盛んな町でここのクラブからナショナル選手3名が選ばれていた。町の人口が1万3千人で連日アスファルトコートを5〜6千人の観衆が取り囲み各国のプレーに声援を送った。

26日の選手団の出迎えと熱狂的な応援は驚ろくばかりだった27日5千人の観衆の見守る中で花々しく開会式が行なわれた。この大会に今まで欧州以外から参加した国がなくアジアより日本の参加は非常に喜ばれ興味をそえ大会を一層盛り上げた。日本もこの大会参加はルーマニア、ハンガリーの強化合宿試合の成果を試すこと、そして来年の世界選手権と同じ予選グループでユーゴとの対戦の前哨戦として大いなる意味を持っていた。又ユーゴも同じことがいえる。組合せは初日に日本が強豪ソ連と対戦しユーゴは地元チームと楽に対戦、2日目に日本対ユーゴの組合せとなっていた。

日本チームの初日は約40日間の精神的、肉体的疲労でソ連チームの強引なプレーに大敗を喫したのだがユーゴ戦となると、この遠征の一つの大きなポイントでありいいかえれば60日間をこの一試合にかけていたともいえる。結果は日本の勝利に終った。ユーゴにとって大きな間違をおこしたことにより大会をより大きく面白いものにした。

ユーゴといえば昨シーズン欧州8千Kmをバス移動により18戦して18勝、欧州のトップクラスにランクされていた。初日の日本の大敗を見てユーゴの選手も関係者もそして6千の大観衆も日本に敗れるとは夢、想像もつかなかったことだろう。そこには日本に対する考えの甘さがあげられるし勝負の厳しさ面白さが存在しているのであった。日本チームは全員死力をつくし、あくことなき勝利への意欲から出た必然的な会心のゲームであった。

試合の終ったあと全員涙を流し手を握り合って善戦をたたえた。然しその時から来年の選手権でユーゴを受けて立つ覚悟をしなければならばない決意をした。ーゴのユハンドボール関係者もその夜来年の選手権に対する計画を全面変更する会議を開いていた。選手にしても世界選手権で優勝すれば国から一人に対し1千ドルを支給されるのでこの敗戦によってすべてが狂ってしまった様にがっかりしていた。3日目ユーゴ対ソ連戦は大会前には優勝決定戦と予想されていたがユーゴは対日本の敗戦で調子がおかしく結局引分け、自動的にソ連の優勝が決定的となり後半戦の興味をなくしてしまった。

日本も第3戦ルーマニアに対し前日ユーゴに勝って緊張が一気にゆるみ疲労がでて10日前ルーマニアに於て同じチームから2勝した自信もから回りし実力を発揮できないままに勝たねばならないゲームをおとしてしまった。

下位の順位決定を残してベオグラードのタシマイダン競技場へ後半戦が持ちこまれた。

立派な競技場であったがライトが非常に暗くそしてユーゴの優勝がだめになったことも手伝って花々しかった前半戦に比べ500人の観衆と実に淋しい2日間となりゲームも迫力を欠いた。

最終日、日本対ハンガリーもハンガリーに於ける1勝1敗の決着をつけるよいチャンスと大いに張切ったが最後の15秒で同点とされ引分に終るまずい結果となりルーマニアの敗戦と合せ残念であったが4点もリードされているのを追い越す力の備わったことは大いなる収獲といえる。

大会を通じて国際試合に対する勝利の執念といろべき根性の強さ体力の発揮、スピードを生かした変化に富んだプレー、防御技術は大いに参考になり学べたと思う。特にソ連の気力体力、スピードに満ちたテクニック、ユーゴの「1ー2ー3」の防御システムから展開する反撃、ハンガリーのリズミカルなスピードのローリングオフェンス、ルーマニアの強引な個人技などは特筆すべきであった。日本もこの遠征の大きな目標であった防御力に力を増した。特にユーゴ戦でよく発揮できた。その防御を基礎として攻撃への素早い展開は実によかった。選手も悪コンディションにもかかわらず死力をつくして戦ったと思う。国際経験を深めいろんな国のプレーに接したことは大いな価値といえよう。なおこの大会の各国優秀選手として表彰されたのは、

ソ連（コヌハブ）
ユーゴ（リドビッチ）
日本（木野）
ハンガリー（フェンコール）
ルーマニア（モルドバン）

の5人だった。

第9回タシマイダン杯大会成績
（6月27日～7月2日ユーゴ）

ソビエト	30	15—8 / 15—5	13	日本
ハンガリー		11—8		ルーマニア
日本	19	13—8 / 6—10	18	ユーゴ
ソビエト		23—18		ハンガリー
マニアルー	15	9—8 / 6—4	12	日本
ソビエト		15(分)15		ユーゴ
ソビエト		21—14		ルーマニア
ユーゴ		22—21		ハンガリー
日本	21	9—11 / 12—10	21	ハンガリー
ユーゴ		17—12		ルーマニア

【順位】
①ソビエト　3勝1分
②ユーゴ　2勝1敗1分
③日本　1勝2敗1分
④ハンガリー　1勝2敗1分
⑤ルーマニア　1勝3敗

座談会

遠征を顧みて

出席者
全日本男子監督　村田　弘
同　コ　ー　チ　勝　繁夫
同コーチ兼選手　竹野奉昭
司　　　　会　藤本強本誌編集長

帰国時のコーチ団。右から村田、勝、竹野氏

司会　今回の合宿はすべての面で画期的なことであり、その成果もまことに大きなものがあったと思うのですが、ルーマニア合宿からタスマジャン杯大会へと順を追ってお話し願いたいと思います。ルーマニアでの合宿は結局一ケ月以上に亘ったわけですね。

竹野　丸34日間でしたネ。

勝　実に長い日時だったのですが、こうして今ふりかえってみると、なにか物足りない気がします。もっとああやればよかった、こうやればよかったというように…

村田　ともかく初めてのというよりかってないスケールの大きな計画でしたし、選手たちも「使命感」というものを非常に感じていましたね。それが今回の遠征のいくつかの苦難を乗り切る大きな要素になっていたと思います。

勝　たしかにそうですね。もちろん来年の世界選手権とかオリンピックとかいったような目標を控えていることもあるのですが、これまでの遠征では感じることのできないような緊張した空気が始終支配していました。

司会　ルーマニア合宿ではどういうことにいちばん重点をおかれたのですか。

村田　我々がいちばん心配したのは実はコンディションなのです。というのは過去に誰もが経験したことのない外国での強化合宿、しかも一ケ月以上の日程を果して乗り切れるかどうかということです。しかも着いて驚いたのは暑さなんですよ。

竹野　最初の日は38度。いきなりですからびっくりしました。

村田　しかも暑い日ばかりではなく急に寒くなる日があるわけです。

勝　これにはたまげました。この調子で先行きどうなるのだろうという不安にまず襲われたわけです。

村田　着いて二、三日休んだのですが一人平均3キロほど体重が減ってしまった。

竹野　休養しても、何か調子が出ないし、これで練習をつづけられるのかと心細かったですね。3日目に紅白試合をした時も守りに廻るとポカーンと立っているだけ……。

村田　ルーマニアの人たちもこんな天候は初めてだといっていました。そしてルーマニアに限らず、今回の遠征の全期間、こうした異常気温がついてまわりました。それにもうひとつとまどったのは練習がすべて屋外で、しかもコートによって大きさが違うのです。

竹野　40m×20mというのは少かったですね。

村田　44m×22m、44m×21m。44m×20mというのもありました。

勝　だんだんこれも馴れて来たのですがこういう点は、むこうの人はなにか大ざっぱです。

村田　ところでさきほどの質問へのお答えなのですが、まず今回の合宿は、行く前からしきりと云われもしたし、云っていたディフェンスの強化、それにチーム造りということに目標をおいていたのです。

この2点についてはネデフ氏もよく理解してくれましたし、彼が実にうまく計画を運んでくれました。

勝　まったくです。我々と充分に打ち合せをしたあと、我々はネデフさんのたてたプランにしたがったのですが、すべてに行きとどいていたのです。

最初のうちゲームの予定は一切なく、ゲーム段階に進んだ時も弱いというか手頃な相手から次第に強いチームという風にレベルをあげ最後にナショナルチームでしめくくってあるわけです。

竹野　しかもテーマというかその日の課程によって他のコーチを連れて来てくれるのですよ。

合理的な練習計画

村田　ネデフ氏の子分というとおかしいのですがいわゆるアシスタントですね。GKのパーナー氏とかトロフィン氏とか、いずれも一流のトレーナーなんですよ。

竹野　トロフィン氏はドルトムントの世界選手権の時のトレーナーだそうです。

村田　ネデフ氏の理論をもうひとつ実践的にするために、彼がそうした人たちを呼んだわけなのですが、これはありがたいことでした。

勝　選手たちもこの人たちを崇拝というか信頼しきっていましたね。

村田　昨年秋、いちど日本に来ているとはいえ、やはり不安もあったわけですがそうした心配が行ってすぐになくなったのは本当によかったと思うのです。しかもネデフ氏が居ない時は、いま云ったような人たちが来てくれましたし……。

勝　それに我々がプランを出すとそれを聞いてくれた上で、アレンジしてくれるというネデフ氏の態度もうれしかったですね。これですっかり安心し切って予期以上の成果をあげ得たのだと思います。

司会　練習計画には一つの流れがあったのでしょう。

村田　そうですね。まず序盤はデフェン

スの強化、それも基本練習というものを中心にしたものですね。中盤以降は試合を経験しながらその面を修正して行くということにしていたのです。

司会　一日の練習日課はどうなっていたのですか。

村田　試合や移動（転戦）がある時は別として基本線としては八時半に朝食、九時半から正午まで午前の練習。一時頃昼食をとってそのあと四時まで昼寝、そして五時からだいたい七時半頃まで午後の練習というようなものでした。

勝　むこうは午前四時にはもう陽が上るし夜も九時頃まで明かるい。

竹野　昼寝が相当休養になりましたね。それにみんなよく寝てた……。

村田　こうした内容の毎日を一週のうち六日間。日曜は休みで、この日はたいてい試合を見に行ってました。

竹野　日曜の休みというのは我々の合宿に限らずすべてがそうで、試合も午前中に終はり午後はなにもかも休みでしたネ。

勝　そうした生活の慣習が徹底しているわけですよ、だからどんなビッグゲームも午前中にやってしまう。

村田　普通の日の試合はだいたい夕方五時頃から八時頃までに行うようです。

司会　宿舎や食事などで苦労はありませんでしたか。

勝　合宿ということもあり、体育センターのような所に泊まるのかと思っていたらビクトリアホテルというブカレストの繁華街にある立派なホテルを準備してくれたのにはちよつと驚きました。

村田　このホテルを基地にして転戦もするわけですが、ずいぶん助かりました。

竹野　遠征して帰ってくると何か安ど感も湧いて、我が家みたいな気にもなるほどでよかったですよ。

村田　食事も、ネデフ氏の手配で米食が用意されていました。これはブカレストだけでなく、遠征先にも指令されていたようで、そういうこまかい心ずかいが実に行きとどいていました。

竹野　野菜サラダが欲しいといえばすぐ調達してくれたし……。

村田　こういうことは精神的に大きなプラスになっていたわけで、選手たちも大変喜んでいました。米食は2日とあけず出たのではないかナ。

竹野　もちろん日本でのようなものではありませんが、ヨーロッパであれだけ米を食べられるなんて思ってもみませんでした。ネデフさんが去年来た時、見て知ってるわけですよ、日本人の食生活を……。

司会　ルーマニア協会の好意というものは大変だったわけですね。

竹野　日本チームの合宿でルーマニア協会の来年度予算を半分食いこんでしまったというような話をしていました。

勝　日本遠征の計画があるが、これで少し延びるなんて云ってもいましたし……

村田　物資面、精神面での好意はまったく頭が下がる思いでした。それに我々を立ててくれたことも感謝しています。

ネデフ氏ももちろん、ルーマニア協会の理事長も、新しい計画を持ってくると必ず「どうだ？」と我々の意見を聞き、承諾を求めたうえで実行への手を打つわけです。

勝　試合も彼らがカードを組んでくれるのですが、いやならいやといってくれとまず聞いてからでしたネ。

村田　それにネデフ氏は試合の時は絶対日本のベンチに入って来ない。終ってから忠告してくれたり、明日の試合はこうだといったアドバイスをしてくれるだけです。

司会　ヨーロッパ・ナショナルチームのシステムの一端がうかがわれますね。コーチングスタッフの自主性というものをそれだけ大切にしているわけですよ。

竹野　そうですね。逆にそれはコーチングスタッフの責任感というものにつながってくるわけですからね。

基礎練習のくりかえし

司会　皆さんのたよりには「厳しい練習」ということがしきりに書かれていましたが、そんなにきつかつたのですか。

勝　私の感じでは練習の内容は日本で今やっていることとさし変わりはないと思いますし、その考え方も差はないと思うのです。要するに『基礎が大切だ』ということなわけで、それを徹底的に反復する点が現在の日本と異るといえるのです。

竹野　11人制時代は日本もそうでしたよ

勝　今、日本のコーチは何か新しい練習を見つけることが、時代の先端を行くというような傾向にありますね。遠征から帰って来ていちばんよく聞かれるのは『ヨーロッパでは何か変った練習をしていましたか』ということなのですよ。

村田　我々からみれば平凡な練習なのですが、ただちがうのは、それがよいとなれば徹底的にやることです。

勝　例えばフットワークの練習も両手を広げて腰を落とし前後左右に進むというものですが、それをいろいろ日本と同じ形のものなのですが、そればつかり1時間でも2時間でもつづけるのです

竹野　サイドシュートだけで半日つぶしたことがありましたね。

村田　そうだったね。あれには我々もおどろいた。その単調さにうちかつこともその狙いにはあるわけだけれど……。

それと脊中の後を通すパスをずい分長く練習したこともあった。

竹野　その時ネデフ氏はこう云うのですよ。『こんなパスが試合で使えるのは1年のうち1回か2回あればいいだろう。しかしそのチャンスに完ぺきに使えるために練習するのだ』と。相撲の琴ヶ浜が得意の内掛けを出す時は必ずそれを決めていたというあの気持に通じるわけです。倒れこみシュートを1時間半や2時間つづけたところで今更急に上手くなるわけではないでしょうし、事実、筋肉の動きまで知って練習しなければならないとも云っていましたが、ともかく、そのワン・プレーが成功するか否かは平生の練習にあるという考えかたが貫かれているわけです。

勝　日本の練習は表面的な形ーバラエテイということにとらわれすぎて、トレーナーの満足が優先されているけれど、ヨーロッパの場合は選手が満足するということが第一に考えられている。

村田　いわゆる〝やりかた〟みたいなものは日本の方が難しいくらいです。

ともかくルーマニアの場合は単純でいやになるようなものばかりだ。選手たちもその単調さに参りかけるが、ある時間が過ぎるとその気持ちを乗りこえられる。そこで

初めて身につくのですね。
竹野　今日の練習は1時間で終るというと選手ははり切る。ところがこれがきつい
村田　フットワークの時だろう。
竹野　そう。
村田　これは2分間フットワークをしたあと50mダッシュして、そこで今度はジャンプ20回、腕立て30回それからまた50mダッシュするというのが一コースで、30秒休んでまたこのコースを繰り返すわけですよ一コースどんなにかかっても4分ほどだから1時間ぶっつづけにやられたら、たいがいの者は参ってしまう。
勝　そうしたハードトレーニングをつづけられたのも、練習外の時間の環境がよかったからだろうね。
竹野　宿舎、食事などで不満がなかったことはたしかに助かったですよ。
村田　しかも、責任感、競争心というものが選手たちにあったから、皆、実によくそれに耐えたと思うのです。
司会　だれずにそうした練習をくり返せるというのは選手の心の持ちようにかかってくるわけですからね。
村田　ルーマニアの指導者たちはそうした日本選手の姿というものを非常に買ってくれていましたね。
竹野　ルーマニア選手ならこんなふうにはいかないよ、といっていた人もあるくらいなのですから。

関心集めた日本の精神訓練

司会　スナゴナのトレーナー講習会に出たというのは
村田　これはルーマニア協会が各クラブの優秀トレーナーを全額負担で招いて行うものですが、たいしたものでした。
竹野　今回はいわゆる中級から上級への間ぐらいのレベルを対象に基本技がテーマだったわけで100名ほど集って1週間かん詰にされて受講していました。昭和35年に来日したルーマニア・ナショナル（11人制）のエース・ブルガル氏がどこかのクラブのトレーナーとして参加していましたよ。
勝　がいして若い人が多かったですね
村田　34〜40才ぐらいかな、女性も4〜5人いたようだった。
村田　感心したのは指導体系というものが一本通っていることですね。そのため、指導者として誰が立っても、どんな選手でもいつでも握ることができるというのはうらやましいことです。
勝　午前中講議、午後は実技でしたが講議ではあらかじめどのトレーナーにはこのテーマで発表せよというようになっていてその研究発表が主でした。
村田　トロフィン氏がナショナルチームをモデルにこのようにして指導していくのだという解説を段階を追って発表していたのも、指導理念の一貫化があるからこそできるわけですね。このほか器具についてとかGKについてとかが論じあわれていた。
竹野　日本の練習法を一時間にわたって紹介しましたよ。
勝　この講習会のプログラム（別掲）の一つにそれが入っていたわけです。
村田　パスから始まる一流しを示したのですが、いわゆるシュートノックやボール拾いをしたら、終ってから『あのような練習をしたのは、選手たちに今日はなにか落ち度があったからか』と質問されました。
勝　精神的な訓練だという説明に非常に関心を持ったようでした。
村田　共鳴した人が多いようだったですね。あるコーチは『そういう訓練が心要だということは感じているが、まだそこまで行っていない。日本の選手はよくついていく』と感心しているのです。
勝　ヨーロッパではこういう練習は少いしやってもダメだということでした。いわゆる「しごき」に対しての評価というか関心はあったようです。
竹野　むこうの連中はナショナルチームはともかく、普通のチームは楽しむことが第一ですからね。女子のボールを持って平気で試合するし……。
村田　ボールといえば、日本の持っているボールがどれも同じサイズで揃っているのに驚いていました。
勝　選手がトレーナーのいうことを聞くのは日本がいちばんではないかな。日本選手は勤勉なわけですよ。
竹野　ヨーロッパの場合は、個性の強い選手を存分に動かすトレーナーがいるということにもなります。
村田　トレーナーとしてはそこまで行くべきだ。
勝　選手を握るということは、服じゅうさせるということではないのだからね。
村田　それにしてもスナゴナの施設はみごとだったね。
勝　しかもゆったりとした設計だ。
村田　こういう施設が国内に三つほど在るそうだけれど、受講者たちも実に熱心だ
竹野　ブカレストから70Kほどはなれた所で、「学ぶ」ほかはなにもない。
村田　食事なども豪勢だったし、彼らはそれを実によく食べる。ニワトリ半羽のほかに牛肉や豚肉をとる。普通の倍のカロリーです。

スナゴナ トレーニング センター に 於ける ルーマニア国内コーチ講習会日程（抜すい）

日	時間	区分	内容
▽第1日		・開会式	（開会の辞講習会の目的説明カリキュラムの説明）
▽第2日	8.30〜19.30	・講議	“スポーツの方向”
		・〃	“ハンドボールの方向”
		・〃	“試合分析及練習計画”
		・討論	
		・発表	“ハンドボールのサーキットトレーニング”
		・〃	“ハンドボールのインターバルトレーニング”
▽第3日	8.30〜19.30	・講議	“トレーニングにおけるスタミナの問題”
		・発表	“青少年へのハンドボール指導”
		・討論	
		・発表	“GKの練習”
		・〃	“トレーニング用具について”
▽第4日	8.30〜19.30	・講議	“テクニックと策戦(1)”
		・〃	“実戦に則したテクニック”
		・発表	“日本チームの練習（実技）”
		・講議	“攻撃”
		・〃	“テクニックと策戦(2)”
▽第5日	8.30〜19.30	・講議	“トレーニング計画”
		・発表	“近代的年間練習計画”
		・〃	“防禦”
		・〃	“学生チームのトレーニング”
▽第6日	8.30〜19.00	・研究	“ルーマニアAリーグの分析”
		・講議	“ルーマニアナショナルチームの準備計画” (1)男子 (2)女子
		・討論	
		・研究	“競技会への二週間トレーニング法” (1)初日 (2)最高潮 (3)最終日
▽第7日	9.00〜11.00	・討論	
		・閉会	

竹野　カヌーのナショナル選手が合宿していたが70Kぐらいのバーベルをひよいとあげるし、女の子なんか片手でささえてしまう。あのパワーはやっぱりそうした食欲にあるのでしょう。

勝　研究発表で興味深かったのはハンドボールのためのサーキットトレーニング瞬発力の養成、シュート力の養成、ボールテクニックの三本が柱で10種類ほどの練習が組み合わさっているのです。

村田　目新しいことではなく、腕立て伏せやそこらにある器材なんかを巧く活用しているのだね。

竹野　メデシングボールの使用や木こりの持つハンマー打ち、それに椅子をせん回させる運動、それらをやってトラックを2・3周走らす。

村田　椅子のせん回などみんなフウフウ云っていた。

ルーマニアの指導体系

司会　さきほど指導法に一貫したものがあるという話が出ましたが、そうしたことは協会の技術部あたりが作るわけですか。

村田　いわゆる技術委員会ですね。しかしまとめるまでは相当激しい議論が戦わされるらしい。例えばGKの要素は何かということについて「体格40％、反射神経30％敏しよう性30％」という意見と、「いや反射神経28％、敏しよう性32％だ」といったこまかい部分の反論まであるという。

勝　何回もそうやって修正して、最後に統一意見をつくり、それを実施するわけです。

村田　今のGKの話は明けがたまでかかったということでしたよ。

司会　そのスタッフのチーフが例のクンスト氏なわけですか。

村田　そうですね。彼が中心です。

司会　クンスト氏と話す機会はありましたか。

村田　日本でいえば文部省のスポーツ局長的立ち場にあり、ハンドボールだけみているわけでないのでなかなか忙しいようでしたが、スナゴナで会った時『今、世界のハンドボール界で四つのことを考えている一つは技術書の図解を世界共通にしたらどうかということ』……。

司会　例えば攻撃者の表示は〇、守備者は●といったようにですね。

村田　そうです。それと『世界スケジュールの調整。第7回世界男子7人制選手権の反省。ハンドボールは将来どのように進むべきかということだ』といっていました。

司会　世界スケジュールの調整というのは新しい見解ですね。

竹野　彼はIHFの技術委員だし、その立ち場での発言でしょう。

村田　シーズン制が確立されているヨーロッパに日本も習う必要があるのではないですかね。

竹野　それに用語がまちまちな点も指摘していました。

村田　国によって解釈というかニュアンスがちがってくるわけですよ。

司会　大変興味深いお話がつづいているのですが、時間（紙数）の関係もありますのでそろそろルーマニア合宿のまとめをお話願いたいのですが。

村田　ともかく34日間の合宿を通してルーマニアの練習方法も日本のそれも大きな違いはないということですね。

勝　精神的な強さを求める練習もあればかなり乱暴な練習もする。

竹野　特にボールにロープをつけ体へめがけて振りまわすディフェンスの練習などは荒っぽい。

村田　大きな体で力いっぱい当てるのでケガをしないかとひやひやしながら見ていたけれど、だからといってそれをいきなりマネしてもダメですね。やはり段階を踏んでからでないと……。ナショナルプレイヤーだからあれが受け切れるわけですよ。

勝　ただ、ここで覚えたこと身につけたことは、やはり自分のチームに戻っても是非行って欲しいですね。そうした練習方法ではなく、その〝心〟ですね。それと痛切に感じるのは日本選手の基礎体力の問題ですね。結局、ボールにヒモをつけてぐるぐる廻しながら体にぶつけるという練習も力と力、大きいのと大きいのがぶつかりあうヨーロッパ球界では必要になってくるわけで、日本の国内試合にはそんなモノは要らない。小手先だけで充分なわけです。

竹野　コーチの立ち場として教えられることも少なくなかったわけですが、ネデフ氏が他のコーチを連れてくると、両者が決して他人の領域を侵す指導をしないということは特に印象深かったですね。

例えばトロフィン氏が来るとネデフ氏は絶対に彼の指導分野に入っていかない。一方ナショナルチームのフオーメーションの組み立てをやっているほどのトロフイン氏もネデフ氏をたてるところはちゃんとたてている。パーナー氏が来ればGKについては彼に一任するといったことが実にはっきりしている。

村田　トレーナーの分担というのが確立されているのですよ。

勝　パーナー氏の指導はGK陣（注・福本、本田、下里）に刺激となったようだ。

竹野　それに彼らは実に試合をよく見に廻っていますね。

村田　小さな試合まで見学している。それも本部席に陣どるというのではなく、あつちこつちでね。

勝　第一、本部席なんていうものはありやしない。

竹野　プレイヤーをよく見ているから口が出せるし、説得力のある指導体系もつくれるのでしょう。

村田　ともかくも一ケ月以上、ハンドボール、ハンドボールに打ちこめ一つのことに熱中できたのはよかったし、その間に練習、試合、移動といった経験を味えたのも収獲でした。バラエテイな日程が組めたのも外国での合宿では大きなプラスになるわけです。

勝　フオーメーションをいくつ覚えたというより基礎の大切なことを再確認したこと。これは常に云われているのですが実際に、それも外国の合宿で体で味ったことは大きいと思うのです。

ナショナルチームに2勝

司会　さて、そうした成果が一挙に咲いたのがルーマニアナショナルからの2勝ということになりますね。

村田　そういっていいと思うのです。このナショナルはAとBに分かれているうちのBの方だったのですが二軍というわけではなし若手の多い編成なのです。

竹野　ともかく勝てたということは嬉しかったし、自信がつきました。やれるんだという気持ちを持ったことは今後にも作用するでしょう。

勝　関係者が口を揃えて『最初とはみちがえるようだ』というのです。

村田　最初の頃はともかく体調不充分だし全員出場をたてまえにしたので、コンビもなにもありませんでしたからね。

竹野　第1戦で負けてルーマニアは次の試合にAから選手を補強したのですよ。三人ほど……。

村田　ネデフ氏に第2戦の前、日本選手に何をいったらよいかと聞いたら『まあ今日は昨日のようにはいかないけれど、ともかく頑張れ、ディフェンスが昨日はよくやった』と云えというのですよ(笑)。彼もまさか2敗するとは考えていなかった。

竹野　彼らが、この2連戦を大きく考えていた現れとして一流のレフェリーを割りあてていたことでも判りますね。それが連敗したのだから大変だ。

勝　第2戦はネデフ氏がルーマニアのベンチに入り、途中でヘマをした選手を上着でたたいておこっていた。

村田　くだらぬ反則で退場をくった選手におこったわけですよ。

勝　ここでの2勝はその後の転戦へよい影響をしましたし、今回の遠征の一つのエポックといつていいと思います。

村田　もちろん、これでおごることは許されませんし、むしろ今後は仇になるかもしれないのですが、最後のレセプションでクンスト氏が実にいいことをいってくれたのです。それは『日本チームにルーマニア人は一人もいない』というのですね。つまりルーマニアで合宿したといってルーマニアの練習ばかり採ってはダメだ。日本人には日本のトレーニングがいちばんいいのだし、その中へルーマニアの長所を採りいれるべきなのだというわけです。

竹野　ルーマニアのバレーボールチームが日本のバレーボールチームの練習法をそつくりマネして失敗したことが過去にあったそうで、それを例にとってクンスト氏はこういう話をしてくれたのです。

村田　まあ、何をとっても世界ハンドボール界の一流国というにふさわしい背景を感じたのですか、選手に克己心を植えつけたばかりでなく、トレーナーの立ち場としても実に多くの得るところがありました。

タシマイダン杯の模様

司会　それでは次にタスマジヤン杯に話題を移したいのですが、この名称についていろいろおたよりを受けましたね。

村田　タスマジヤンが誤りというわけではないのですが、現地ではこれはタシマイダンと呼んでいます。地名なんですよ。

勝　タシマイダン競技場とかタシマイダンホテルとか。

司会　では本誌でも今日からタシマイダンに統一することにしましょう。早速そのお話をうかがいたいのですが、たしかこの大会は今年9回目でしたね。

村田　ユーゴというのはヨーロッパのハンドボール界でも非常に古い位置を占めていますし、盛んなわけですが、いつそうそうしたムードを盛りあげるためにこの大会を開いているようです。

司会　日本が招待された理由はどこにあったのですか。

勝　判らずじまいで、教えていただきたいくらいです。(笑)

村田　女子の大会でザグレブカップというのがあり、こっちにも日本は招かれていたのですね。

竹野　はじめ日本は男子でなく、ザグレブの方へ出るというように伝えられていたらしい。

司会　大会の模様はどんなでした

村田　総経費は五百万円とかで、今年はタシマイダンのほかザビドビッチという所で前半が行われました。これはザビドビッチが市制75周年を祝う行事の一つとして招いたもので大変な歓迎ぶりでしたよ。

竹野　この市からナショナルプレイヤーが二〜三人出ておりユーゴでもハンドボールが最も盛んなところだそうです。

勝　ホテルを選手村として貸し切り、小さなオリンピックという感じで、参加国が一緒にザビドビッチ入りしたため駅は歓迎の人で埋まり、そのあと市中パレードと華やかなものでした。

村田　タシマイダンの方は冬はコートに氷をはつてアイスホッケーをするとかでした。開会式はザビドビッチで行われたのですがいわゆる日本式なものでしたね。

竹野　挨拶もあつたし……。

司会　第1戦のソビエト戦についてうかがいましょう。

竹野　完敗でした。4年前の世界選手権で顔を合せているのですが、その時のメンバーがまだ二〜三人いました。あの時は10—40だったかな。ソビエトのプレー、特に攻撃は止められるように思うのですが、それがやられてしまうのですね。

村田　ルーマニアからハンガリーを経てソビエトと対戦したのですが、まつたくタイプがちがうわけで、日本の選手はとまどっていましたし、ともかくも、来年の世界選手権の本命グループに入っているだけのことはありますね。

竹野　GKも抜群でした。ノーマークを何本もとられ、なんとなく点差を開かれた感じです。はじめのうちは勝てるのではないかという気さえしたのですが、次第にディフェンスがゆさぶられ、守りの焦点というものをつかめなくなったのが敗因でしょう。

村田　力をゆるめるということがないですね、ソビエトは。これでもか、これでもかといったように攻めてくる。

竹野　ディフェンスの右から攻めて来たなと思うと今度は左から、そして今度は中央と多彩だし、我々が経験したことのないコンビネーションにも参りました。

勝　それまでのナショナルチームとの対戦はルーマニアの2試合にしても、ハンガリーの2戦にしてもいわゆる親善試合でそれが選手権になるところまでと思うほど試合ぶりが変わりますね。観衆も沢山入っていたし、燃えかたがちがうのです。ソビエトの攻防は実に理詰めでしたね。

村田　先手々々をとられたのが第1戦だけに響いたと思う。あれが第3戦あたりな

ら、あるいはという気もします。

竹野　でも、第1戦の大敗が、逆にユーゴを倒す金星につながったとも云えますよ

司会　ではユーゴ戦のお話に移りましょう。この試合は日本のファン、関係者は今回の遠征でいちばん注目していたところだと思うのです。

ユーゴーに勝った意義

村田　世界選手権を前に、その当面の目標と対戦するというのは願ってもないことでしたが、ともかくヨーロッパにおけるユーゴの評判は高い。

竹野　どこででも来年の世界選手権の優勝はチェコかユーゴ、それかルーマニアだというのです。日本はチェコ、ユーゴと同じ組だというと「わあつ」といわれる。

勝　この組（注・B組）から優勝国が出るというのがもっぱらの評判なわけです

竹野　つまりチェコかユーゴというのですよ。

司会　ユーゴへの評価が高いというのはなにか理由があるのですか。

村田　来年をめざして2年前から長期的な強化プランがたてられ、その中に「ナショナルチームの八千キロバス旅行による18連戦」というのがあって、去年の冬から今年の春にかけて実行されたわけです。そしてその18試合に全部勝ったんです。

勝　チェコも西ドイツもルーマニアもやられている。

村田　そこに日本が勝ったのだから大変な騒ぎになった。

竹野　長期プランをねりなおさなくてはならないと日本戦のあとユーゴのコーチはいつていました。

勝　もし、これが来年のパリでの出来ごとだつたら、オレはハラキリだと監督はまがおでいうのです。

村田　デフエンスのシフトがいわゆる「ユーゴ三角形」―3・2・1という形なのですね。これが今シーズン、ヨーロッパ球界にセンセーションを巻きおこした。それを突破して日本が勝ったわけで、スタンドは騒然とするし各国の役員は後半の終り頃から日本のベンチの後に立って声援してくれるのです。ハンガリーの役員などは時計をさして、あとこれだけだなんていう。

司会　3・2・1というのは5・1の変形ですか。

竹野　そうですね。5・1の5がくずれているような形。

村田　ですからボンヤリ見ていたのでは判らない。

勝　日本でも5・1を採ると、たまたまそういう形になる時がありますね。

村田　それがシフトとして完成しているのは、3・2・1の3の真ん中が実によく動くということです。

竹野　1の位置は5・1の1（トップ）と同じで、その後に2・3と並ぶのです。

村田　3の真中の動きの速さはちよっと口では云い表わせないくらいです。前後左右実に敏しようだ。このシフトのいいところは速攻への転換がまことに早いということでしようね。

勝　攻撃的ディフエンスといえるでしよう。つまり、いったん守りから攻めにスイッチしたら、実につなぎがいい。

司会　かつてのスエーデンの3・3と現行のシフトの中間的なものですね。

村田　そういつてよいと思います。

司会　3の真ん中は特定の選手ですか。

竹野　誰でもできるようになっているようでした。

司会　日本の勝因は気力に負うところが多いのですか。

村田　それももちろんあります。一般の予想では九分一分か、よくて八分二分。しかも前日に大敗（ソビエト戦）していましたからね。ところが、フタをあけてみると日本の先制攻撃がうまく実った。

竹野　5点までリードしたものね。

村田　それとやはりディフェンスがよかったですよ。固く守って攻めに移ると二段、三段速攻がみごとに決まった。これが大きかったと思います。つなぎがうまくなければ、今や外国チームに速攻はききません。ワンパスが通用するのは国内戦だけですね。

竹野　井上と野田がよく走りましたし…

勝　それと7MTを下里がよく止めた7MTの時だけ福本に替えて下里を出した村田監督のカンの冴えも勝因ですよ

司会　7MTの時シューターやGKを替えたりする方法は各国盛んですか。

村田　多いですね。しかもなかなかその選手が出てこない。そんなことから「ロス・タイム」の問題が出ているようです。それにしても下里はよく捕った。一躍スターになってしまい、新聞にデカデカと「下里ユーゴの青い艦隊（ユーゴのニックネーム）を沈める」という見出しが出て、プレスのインタビューは大変だった。

竹野　「お前はつねに7MTの時だけ出てくるのか」とか「日本で何番目のキーパーか」などと聞かれてくさってたよ。

勝　福本、本田、下里のGK陣は三者三様の味があってよかった。

村田　最後になったら下里が出てくるとユーゴはみんな尻込みしちやって7MTの射ち手がいなくなった。（笑）

勝　しかし、勝ったことによつて新しい課題が生まれましたね。本番で〝追われる身〟というのは大変なことで、しかも今度は日本の総てをさらけ出していますし。

竹野　「パリで勝負をつけよう」と挑戦されました。

村田　選手が自信を持ったことは大収獲なのですが、本番でのユーゴ戦がやりにくいものになったというのはたしかです。

竹野　ルーマニアでも、ユーゴよりチェコを倒すことを考えろといわれました。

勝　でも選手には、これほど大きなものはなかった。試合が終ったら皆、涙を流していました。あんな情景は初めてだ。

司会　それはすばらしいことですね。日本選手がそこまで死に物ぐるいでやって、しかも勝利を得たというのは今回の遠征の最大のものでしよう。

村田　ユーゴ戦が終はって、だから虚脱感におそわれ、ポーッとなってしまった。それがルーマニア戦の敗戦、ハンガリー戦の引き分けになってしまったのです。

本番（世界選手権）は全勝の意気

勝　ユーゴ戦で、遠征の主なるものが終はったという気持ちはたしかにあった。ルーマニア戦など、やっぱり前日の興奮が全員に残っていましたよ。

竹野　これはしかし反省すべきですね。本番ではチェコ、ユーゴそしてカナダと続くでしょう。ユーゴ、チェコのどちらかを食ってもカナダに足をすくわれかねない。

村田　日本、ユーゴ、チェコが三つ巴になるとカナダ戦の得、失点がカギとなるケースは充分に考えられます。

勝　たしかにそうだね。

竹野　本番では3戦全勝を目標にぶつからねば絶対ダメでしょう。

勝　ユーゴ、チェコにしても今回の日本の戦いぶりで考えかたを変えるようですよ。つまり、彼らは決勝トーナメントをどう戦うか、そこへどのようにコンディションをもっていくかばかり考えて、日本とカナダまたはアメリカにあまり気をつかっていなかったわけなのですよ。

司会　偵察活動はやはり盛んでしたか。

村田　スペインでIHFの審判講習会があったためあまり他の国の人たちは来ていなかったようです。

勝　ユーゴも別にフィルムやビデオをとっているようなこともなかった。

竹野　まさか負けるとは思わなかったのでしょう。

村田　彼らが必死だったのは試合後で、なんとかもう一試合ザビトビッチでやってくれと2時間も粘られた。ルーマニアの連中なんか「よせ、よせ」といっていたけどユーゴとしては、ともかくもう一試合して五分にしておきたかったのだろうな。

司会　ルーマニア戦はいかがでした。

村田　ルーマニアとしては2連敗のあとだしメンバーをかなり補強し、もし、またここで日本に負けたら本国へ帰れないといってました。日本としては3連勝の自信は大いにあったのですが、ユーゴ戦の興奮があまりにも大きかったことと近藤が試合途中でケガをしてからチームの調子が狂ってしまい、惜しい負けかたでした。

司会　ハンガリー戦は

勝　これも勝てた（笑）

村田　5点はなされたのを追いついて、あとは一進一退。追いこめる力を備えたことは賞していいし、この反撃は迫力もあった。それだけ力（パワー）がついて来たのです。勝って終るべきだったのに惜しいことをしました。

勝　今回の遠征によって、これまでの「善戦意識」から「勝ちムード、勝ち策戦」へと伸びたことはたしかですよ

竹野　ハンガリーのチームプレーというのは実にリズミカルですね。全員がすばらしいテクニシャンだ。

村田　ルーマニアはどちらかといえばダイナミックな力のチーム、ハンガリーは攻めがきれいで巧い。ディフエンスしていても、ぶっかった時にはもうボールが放れている。動きもせん細で速い。

勝　日本は力がないだけに、このハンガリーのプレーを学びたいですよ

村田　ハンガリーとはつねにとったりとられたりするんです。ですから先手をとることが必要になって来ます。

竹野　大会の前にハンガリーで3試合をしたのですが負ける気はしませんでした。

村田　雨中戦やコート条件などに左右された面もありましたね。

勝　ルーマニアの後にハンガリーへ入ったわけですが、ルーマニアのチームはポイントゲッター中心で的がしぼりやすいのですが、ハンガリーはそうはいかない。

村田　ルーマニア、ハンガリー、西ドイツといったように、各国の特色というか、世界にはいくつかの流れがありますね。そうした異った相手に短時間にぶっかれるところに国際競技会出場の意義があるわけです。

竹野　できれば一年に1度はこうした経験を積みたいものですね。

村田　世界選手権だけ出ていてはとてもダメです。

勝　日本でこういう大会を開けないものかなあ。

竹野　ヨーロッパの連中も日本はもっとこっちに出かけてくるべきだといっていました。そうすれば絶対に世界の最上位にのぼるチームだとも云ってくれました。

村田　我々トレーナーというかコーチングスタッフも今回のようなことでずい分勉強になりますね。

勝　ベンチワーク。国際舞台では馴れがないとダメですし

村田　選手もまた我々にとってもネズミ算的に収獲が増えていったといえます。

竹野　戦力的にも、精進的にも互角の心境までに近づけましたものね。

勝　さっきも云ったように善戦しょうといっていたことから勝とうというところになった。一つのカベを突き破った気持ちは持てましたね。でもまだ問題はありますね。

村田　ユーゴ戦に勝って虚脱状態になったというのも、結局は、初めから優勝という点に目標をおけない弱さがあるわけですよ。

優勝を目指していたならユーゴからの勝利も「1勝」にすぎないし……

司会　急にそこまで行けるというものではありませんしね。ところで各国のハンドボールの位置というのはどうですか。

竹野　廻った国々はすべてハンドボールの一流国ですからね。

村田　サッカーはどこへいっても別格でそのあと上位三指にハンドボールは入ってます。ハンガリーなども組織は確立されているし、10才〜12才までの少年ナショナルチームがあるのですよ。

竹野　さらにそこから上手なのをしぼってスポーツ学校に入れるらしい。

勝　タシマイダン杯も連日沢山のファンが入っていた。今回はナショナルとの対戦はどこもよくお客さんがいましたね。

村田　東洋のチームということも手伝ってね……。今年のタシマイダン杯を面白くしたのは日本だとある記者がいってました。第一にユーゴを破ったことによって順位争いをものすごく面白くしたわけです。

司会　ユーゴは日本に負けて優勝を逸したのですからね。

竹野　ユーゴ戦の時は、五千近いファンがはじめのうちは日本に同情的な声援を送っていたようですが、ユーゴが苦しくなってくると後半は反対にユーゴへの応援がすごくなりました。

村田　谷間の中間につくられたハンドボール専用のコロシアムが大歓声につつまれて湧いたですものね。

風格のある西ドイツ

司会　遠征の最後に西ドイツへ立ち寄られていますね

勝　あそこはまだ11人制が残っていますし、そのシーズンだったわけですが、7人制でもその特色がよく現れていました。

村田　ビックトレーナーは『前に来た時より日本ははるかによくなった』といってくれました。特に45度とGKの進境をほめてました。

竹野　ナショナルとの試合は8点あきましたけど2～3点差ということですね。

村田　いいコンディションなら勝てたと思いますよ。それにしても西ドイツのチームはカラーというか風格があります。歴史があるだけでなく世界の一つの流れを形成しています。

竹野　ある面オーソドックスで、ある面非常に新しい……

勝　11人制の影響で豪放な面が今回は強く出ていました。

村田　キールでのナショナルの時、これは試合に直接関係はないのですが、試合が終ってからのプレス・インタビューに感心しました。私と相手の監督が出て、進行を協会の技術部長がつとめるわけで、まず観客数の発表と日本の紹介が今回のルーマニア合宿のことを含めてあり、つづいて技術部長が所感を述べるのです。その中で審判が巧いとか拙いとかはっきりいうのです。

竹野　この時はデンマークから二人が来て担当したのです。

村田　なかなかきびしい批判でしたよ。そのあと記者からの質問があって「入場券が高すぎる」といった注文も出るのです。

勝　最低の席で5マルク（邦貨約五百円）とか云ってました。

竹野　キールではふだん好カードがないという話でした。

司会　記者会見の席で、そうした運営をふくめた一切の反省をするというのは参考にしてよいことですね。ところで西ドイツのオリンピックムードはどうですか。

村田　一般的にはまだまだのようですが競技関係者は大変な熱の入れようです。

勝　これは西ドイツに限ったことではありません。

竹野　各国とも一九三六年以来というこの好機に異常なほどの高まりをみせ、そしてまず来春のパリ大会ということになっているようです。

司会　今度の遠征で目についた外国選手はいますか。

竹野　ソビエトのGKイチエンコ。

村田　1m92もあり、よく動くんです。

勝　ユーゴのGKもよかった。

村田　FPではルブキング（西ドイツ）。キールでの試合で15m近いシュートを決められたのにはたまげた。あれだけで西ドイツに立ち寄ったカイがあったと云える。

勝　ルーマニアのナトが西ドイツに留学していて、すっかり円熟したプレーを見せていたのも印象に残っています。

竹野　ユーゴのポストマン。3・2・1の1をつとめていた選手もよかった。

村田　ハンガリーのサウスポー・カロもいい。それにフエンコール。

竹野　グルイア（ルーマニア）はもう下り坂といった感じですね。

勝　ヒザを痛めていたし。

村田　ルーマニアではニカとか左利きのモルドバンが目立つ。それと「二つのG」といわれる……。

竹野　ガツとグネスね。

司会　審判の判定解釈はどうでしたか。

勝　日本とほとんど変わりません。

竹野　日本の方がちょっとこまかい面もあります。国によって違う点は多少あります。

村田　クンスト氏が統一を強調するゆえんでしょう。

小柄な選手の特色も活かせる

司会　それでは最後に一言づつ今回の遠征の総まとめというかむすびの御意見を伺いましょう。竹野さんからひとつ……。

竹野　〝世界〟というものは決して遠くないという気持ちを抱いたことが最大の収獲になったと思います。日本人は体力面で劣っていたのですが、史上最高といわれる大型チームで行って、強い相手にも勝てるという自信を得ることができました。もちろん反省もあります。今日いいかと思うと明日悪いという不安定、この波をなくすことはなかでも急務でしょう。

勝　私は慎重派なんで勝ったことは勝ったがよくふり返ってみると〝アジアの日本〟という意外性がかなり作用していると思うのです。ナショナルチームとの勝敗は9戦4勝4敗1分だったわけですが、この五分の成績がホンモノかどうか、もういちど分析したいわけです。それと、いわゆる小柄な選手、例えば野田や井上のプレーが通用し、戦力となったことは今後の選手選考に一つの示唆を与えたといってもよいでしょう。今回の場合、身長を優先して選考を進めたのですが技術、体力、体格の各面でバラエティに富んだ編成を心がけるべきでしょう。またウェイトというものも重視する時に来ています。大きいということが重いということにもつながるように仕向けるべきです。

村田　今、二人が云ったことで云いつくされると思いますが、ともかく勝つ自信を得たことは収獲です。しかし、竹野君も云ったようにナショナルに勝つかと思うと二流チームに苦戦して、終盤やっと勝負のメドをつけるという不安定な力は、まだ本当の力に乏しいことを示しているわけです。今回は、まがよかったから15勝4分といい成績を残せましたが、下手をすればとてもこういかなかったと思う。今の実力を伸ばしていくことはもちろん必要ですし、ディフェンスの強化もいぜん課題です。それと勝負を決めるシュート力を養うことも欠かせません。勝利へ結びつけるシュート力をつける一方、相手のそうしたシュートをはばむ守りの力を備えることが今後の合宿のテーマになるでしょう。その意味で、遠征の最後に西ドイツのルブキングに突風のような15mシュートを見せつけられたのはよい教訓になりました。こうしたことに加えて日本チームの特徴とする「素早さと正確で変化に富んだコンビネーション」をよくするようつとめます。

司会　どうも長い間貴重なお話をありがとうございました。（7月28日、体協で）

ブロック高校選手権

明星と昭和学院勝つ
第15回関東高校

7月23日から26日までの4日間茨城県・笠間高グランドに関東8県から男女各4代表あわせて64校が参加して行われた。

男子は、本命とみられた中大附属（東京・前年優勝）が欠場し混戦模様となったが、明星（東京）が安定した攻守で、桐生工・富岡（群馬）、塩山商（山梨）らインター・ハイ出場校をおさえ2年ぶり8度目の優勝。

女子は予想どおり昭和学院（千葉）がすぐれた攻撃力で初優勝した。男女を通じ千葉代表の優勝は初めて。

▼男子1回戦

塩山商(山) 20—14 馬頭(栃)
竜ケ崎一(茨) 27—8 清水(千)
横浜一(神) 19—15 甘楽農(群)
鷲宮(東) 14—12 教大附坂戸(埼)
相模台工(神) 21—5 園芸(山)
足利工(栃) 17—9 桐生(群)
笠間(茨) 13—11 四谷商(東)
浦和市立(埼) 19—15 木更津商(千)
富岡(群) 23—11 朝霞(埼)
川和(神) 29—12 石岡商(茨)
甲府工(山) 17—13 佐原(千)
国立(東) 18—9 足利(栃)
麻生(茨) 13—10 足利商(栃)
日川(山) 17—9 小金(千)
川口工(埼) 21—10 関東学院(神)
明星(東) 14—6 桐生工(群)

▽同2回戦

塩山商 19—10 竜ケ崎一
鷲宮 11—9 甘楽農
足利工 16—10 相模台工
笠間 14—10 浦和市立
富岡 21—13 川和
甲府工 12—11 国立
麻生 18—14 日川
明星 19—11 川口工

▽同準々決勝

塩山商 15（6—3、9—6）9 鷲宮
笠間 15（7—4、8—8）12 足利工
明星 16（7—4、9—6）10 麻生
富岡 26（14—1、12—5）6 甲府工

▽同準決勝

塩山商 16（10—7、6—4）11 笠間
明星 14（7—5、7—5）10 富岡

▽同3位決定戦

富岡 22（12—7、10—3）10 笠間

▽同決勝

明星 14（6—3、8—4）7 塩山商

▲女子1回戦

八郷(茨) 14—5 横浜南(神)
佼成学園(東) 16—5 高崎女(群)
浦和南(埼) 12—5 足利女(栃)
佐原女(千) 13—7 山梨(山)
前橋市女(群) 14—5 熊谷商(埼)
笠間(茨) 10—7 上溝(神)
甲府二(山) 6—5 園芸(東)
栃木女(栃) 11—1 八千代(千)
国学院栃木 11—8 深谷女(埼)
石岡二(茨) 6—5 高崎市女(群)
平塚江南(神) 30—0 和洋女附国府台(千)
菊華(東) 15—9 日川(山)
昭昭学院(千) 22—2 塩山商(山)
桐生女(群) 9—7 小山城南(栃)
江戸川(東) 10—9 川口女(埼)
水海道二(茨) 10—5 衛生短大附属二俣川(神)

▽同2回戦

八郷 6—4 佼成学園
浦和市南 11—9 佐原女
前橋市女 14—7 笠間
栃木女 22—2 甲府二
国学院栃木 7—3 石岡二
菊華 11—5 平塚江南
昭和学院 13—3 桐生女
水海道二 16—2 江戸川

▽同準々決勝

昭和学院 11（4—3、7—1）4 水海道二
前橋市女 10（6—0、4—2）2 栃木女
菊華 7（6—3、1—3）6 国学院栃木
八郷 9（2—2、7—4）6 浦和市南

▽同準決勝

昭和学院 11（6—6、3—3、2—0、0—1）10 菊華
前橋市女 8（4—4、4—3）7 八郷

▽同3位決定戦

八郷 5（2—4、3—1）5 菊華（引き分け）

▽同決勝

昭和学院 10（5—3、5—3）6 前橋市女

添上、枚方ゆずらず
第12回近畿高校

7月22日から3日間、県立神戸商高球技場に近畿6県から男子22校、女子16校が参加して開かれた。

男子は準々決勝で、洛星（京都）を降した枚方（大阪）と、堺工（大阪）を破った添上（奈良）が決勝に進んで激戦を展じ、第2延長にもつれこんだが、結局雌雄を決せず9—9のまま引き分けとなり両者優勝となった。ともに初優勝。

女子は、インター・ハイ代表が順当に勝ち進み、激しい星のつぶしあいから大谷（大阪）が決勝で粉河（和歌山）に辛勝、初優勝を決めた。

▼男子1回戦

枚方(大) 19—5 笠田(和)
嵯峨野(京) 10—8 生駒(奈)
高島(滋) 13—9 坊蔭(和)
明石(兵) 24—8 東大寺(奈)
彦根東(滋) 11—6 御武商工(和)
桐庫工(兵) 17—6 乙訓(京)

▽同2回戦

洛星(京) 18—8 明石
枚方 19—2 八幡工(滋)
嵯峨野 19—11 新宮(和)
兵庫工(兵) 11—6 桜塚(大)
添上(奈) 11—9 武庫工
堺工(大) 16—11 高島
滝川(兵) 9—8 彦根東
佐野工(大) 17—8 平安(京)

▽同準々決勝

枚方 9（6—2、3—4）6 洛星
兵庫工 10（4—8、6—1）9 嵯峨野
添上 9（2—4、7—3）7 堺工
佐野工 12（4—5、8—3）8 滝川

▽同準決勝

添上 16（6—4、10—2）6 佐野工
枚方 8（4—2、4—1）3 兵庫工

▽同決勝

添上 9（3—4、4—3：1—0、0—1：1—0、0—1）9 枚方（引き分け）

▼女子1回戦

春日丘(大) 6―4 甲子園学院(兵)
神戸商(兵) 9―7 十津川(奈)
生駒(奈) 7―3 鈴蘭台(兵)
精華(京) 5―4 八幡商(滋)
粉河(和) 7―3 明徳商(京)
鶴見商(大) 10―8 守山女(滋)
大谷(大) 9―3 御坊商工(和)
西京商(京) 6―1 夙川(兵)

▽同準々決勝

精華 8（3―3、5―1）4 春日丘
粉河 8（3―0、5―2）2 神戸商
生駒 6（4―1、2―2）3 鶴見
大谷 3（1―1、2―0）1 西京商

▽同準決勝

大谷 5（3―1、2―2）3 生駒
粉河 6（3―1、3―3）4 精華

▽同決勝

大谷 3（1―0、2―2）2 粉河

新居浜工17連勝飾る
第17回四国高校

7月21、22日の両日、高知、追手前高グランドに四国4県の代表男女各8校を集めて行った。

男子は新居浜工（愛媛）が今年も強味をみせて快勝、第1回以来無キズの17連ぱを記録した。

女子は、インターハイの優勝候補に推されている新居浜商(愛媛)が抜群の攻守を示し、決勝では池田（徳島）からシャットアウト勝ちを奪って4年連続優勝を遂げた

▼男子準々決勝（＝1回戦）

三本松(香川) 14（9―2、5―3）5 城北（徳島）
追手前(高知) 16（9―7、7―8）15 松山東(愛媛)
高知西(高知) 9（6―2、3―4）6 徳島東工(徳島)
新居浜工(愛媛) 12（8―3、4―1）4 坂出工(香川)

▽同準決勝

追手前 18（12―1、6―8）9 三本松
新居浜工 9（6―1、3―2）3 高知西

▽同3位決定戦

高知西 13（9―3、4―2）5 三本松

▽同決勝

新居浜工 8（4―2、4―2）4 追手前

▼女子準々決勝（＝1回戦）

高松女商(香川) 13（4―4、9―1）5 勝浦園芸(徳島)
新居浜商(愛媛) 17（9―1、8―0）1 高知西(高知)
池田（徳島） 10（2―2、8―1）3 山田（高知）
三本松(香川) 7（3―2、4―3）5 松山商(愛媛)

▽同準決勝

新居浜商 11（3―3、8―0）3 高松女商
池田 5（3―4、2―0）4 三本松

▽同3位決定戦

三本松 10（4―0、6―2）2 高松女商

▽同決勝

新居浜商 12（5―0、7―0）0 池田

九州女学院が初優勝
第19回九州高校

7月23、24日の2日間、鹿児島県・甲南高球技場に男子7、女子8校が参加して争われた。

男子はインターハイ代表校がそれぞれ持ち味を活かしたプレーで勝ち進んだが、決勝では鶴崎工（大分）が、新進のマリスト学園（熊本）に対して攻守に一日の長を示し制勝、2年ぶり2度目の優勝をとげた。

女子は新鋭の抬頭がめだったが九州女学院（熊本）が島原農（長崎）に前半のリードを活かして勝ち、初優勝した。

▼男子準々決勝（＝1回戦3試合）

鹿児島工(鹿児島) 17（6―8、11―4）12 田川工(福岡)
鶴崎工(大分) 24（8―6、16―6）12 佐世保北(長崎)
加治木工(鹿児島) 22（11―4、11―4）8 都城工(宮崎)

▽同準決勝

鶴崎工 31（16―6、15―7）13 田川工
マリスト学園(熊本) 27（11―5、16―4）9 加治木工

△同3位決定戦

加治木工 18（12―7、6―8）15 鹿児島工

▽同決勝

鶴崎工 19（7―4、12―6）10 マリスト学園

▼女子準々決勝（＝1回戦）

島原農(長崎) 11（4―2、7―0）2 泉ケ丘(宮崎)
大分東(大分) 10（2―1、8―2）3 財部(鹿児島)
九州女学院(熊本) 11（4―1、7―4）5 神埼農(佐賀)
加治木(鹿児島) 9（5―3、4―5）8 古賀(福岡)

▽同準決勝

島原農 5（2―1、3―2）3 大分東
九州女学院 11（8―2、3―2）4 加治木

▽同3位決定戦

加治木 7（3―4、4―2）6 大分東

▽同決勝

九州女学院 14（7―1、7―7）8 島原農

鹿児島協会の新住所

鹿児島協会はこのほど連絡先が次のように変更された。

鹿児島市草牟田町三九一八・県立鹿児島工業高校内

訂正　本誌前号8頁1段目「荒井清美監督の話」とあるのは「荒川清美監督の話」の誤りでした。お詫びして訂正します。

おことわり　本誌66、67号に掲載しました「全日本高校選手権各県予選記録」は未着県を残していましたが67号で打ち切りました。

松田選手が交通禍

埼玉教員クラブの主力選手として活躍していた松田政昌選手（25才、東京墨田川高―東京教大出・県立草加高教諭）は7月24日夜、友人の運転する自動車に乗っていて交通事故にあい頭がい骨を骨折、手当てのかいなく亡くなられた。

松田選手は高校時代から洗錬されたプレーで所属チームの中心となり、学生、教員界ではトッププレイヤーの定評を得、特に昨夏、埼玉教員が全日本教職員選手権で優勝した時はその原動力となり、今シーズンもその活躍が待たれていた。指導者としても今後に期待が寄せられていただけに、同選手の不慮の他界を惜しむ声は大きい。

8月15日から上尾で行われた第12回全日本教職員選手権開会式では、高校・大学・クラブを通しての球友北井晴次選手が遺影をかかげて入場、参加者全員が黙とうをささげた。

松田政昌選手の御めいふくをつつしんでお祈り申しあげます。

北海道代表決まる……国体

各地の記録

10月26日から長崎市で開かれる第24回国体をめざす各地域（ブロック）予選は、8月末から9月にかけて一斉に行われるが、そのトップを切って8月10、11の両日室蘭商で北海道予選が行われその代表が決まった。なお一般男女は第24回北海道選手権を兼ねた。

▽一般男子準決勝
室蘭ク　棄　権　函ヶ丘
函工OB　20（8—2、12—8）10　稜友ク
▽同決勝
函工OB　17（5—9、12—6）15　室蘭ク
▽同女子決勝
室　蘭　ク　13（8—2、5—4）6　函館ク
▽高校男子準決勝
室蘭選抜B　棄　権　札幌商
室蘭選抜A　6—5　函館選抜
▽同決勝
室蘭選抜A　18（9—5、9—5）10　室蘭選抜B
▽同女子準決勝
室蘭選抜B　11—5　岩見沢駒大
室蘭選抜A　10—0　函館選抜
▽同決勝
室蘭選抜A　22（9—0、13—2）2　室蘭選抜B

名古屋市に初の栄冠

第7回5大都市体育大会ハンドボール競技は7月12日から3日間大阪の淀商高球技場でリーグ戦によって行われ名古屋—横浜の優勝争いとなったが名古屋市が逆転勝ち、初優勝した。

大　阪　29—17　神　戸
名古屋　17—9　京　都
横　浜　22—16　神　戸
大　阪　17—15　京　都
名古屋　18—16　大　阪
横　浜　16—14　京　都
名古屋　21—16　神　戸
横　浜　25—18　大　阪
京　都　18—14　神　戸
名古屋　13—11　横　浜

【順位】①名古屋市4戦全勝②横浜3勝1敗③大阪市2勝2敗④京都市1勝3敗⑤神戸市4敗

第一航空群（鹿児崎）が優勝

全国海上自衛隊航空部隊連合ハンドボール大会は7月8、9、10の3日間宇都宮海上自衛隊に11チームが参加して行われ第一航空群（鹿児島）が、優勝を飾った。

▽予選リーグ甲組順位①大村航空隊（長崎）5戦全勝②第一航空群（鹿児島）4勝1敗③第二航空群（青森）2勝3敗④鹿屋教空群（鹿児島）・三術校（千葉）1勝3敗1分⑥大湊航空隊（青森）1勝4敗
▽乙組順位①宇都宮教空群（栃木）4戦全勝②月教空群（山口）3勝1敗③第四航空群（千葉）2勝2敗④第21航空群（千葉）1勝3敗⑤第三航空群（徳島）4敗
▽決勝トーナメント1回戦
大村航空隊　20（9—1、11—7）8　月教空群
第一航空群　13（5—2、8—5）7　宇都宮教空群
▽同決勝
第一航空群　10（7—4、3—3）7　大村航空隊

▼第22回富山県民体育大会ハンドボール（8月・富山）

▽高校男子準決勝
氷　見　23—3　富　山
小　杉　21—12　富山工
▽同決勝
氷　見　17—14　小　杉
▽同女子決勝
高岡女　10—3　小　杉
▽中学男子決勝
富山堀川　20—11　婦負八尾

▼岡山県体育大会ハンドボール（8月・岡山）

▽高校男子準々決勝
県選抜　18—12　児　島
倉敷商　17—4　関　西
矢　掛　14—10　玉　野
津　山　13—12　津山工
▽同準決勝
高校選抜　17—8　倉敷商
矢　掛　9—8　津　山
▽同決勝
県選抜　22（9—12、13—3）15　矢　掛
▽同女子準々決勝
真　備　14—10　操　山
落　合　11—4　井　原
津山商　17—5　金　川
県選抜　シードによる不戦勝
▽同準決勝
県選抜　11—2　真　備
津山商　8—6　落　合
▽同決勝
県選抜　15（10—3、5—1）4　津山商
▽一般女子決勝
井原OG　15（7—3、8—5）8　岡山ク

お詫び　本紙前号（第67号）に掲載の「第21回全日本総合選手権展望・男子」「全日本教職員選手権展望」は、日本協会常務理事会（合議スタッフ）が全日本第2次候補17名の国内試合出場規制の解除を決定した7月28日より以前に印刷・刊行いたしましたため、出場選手の変更及び戦力分析に誤差が生じました。読者各位に御めいわくをおかけしましたことを謹しんでお詫びします。

—日本ハンドボール協会編集部—

・・・編集後記・・・

○……本誌としては3度目の増頁。炎天下にくりひろげられた三つの全日本選手権大会と全日本男子による遠征リポートなどが重なったためです。
読者各位にも歯ごたえのある内容になったと思うのですが……。
○……できることなら毎号この程度のページ建てで行きたいのですが、原稿量に不安があり当分のあいだは踏み切れそうにありません
全国の読者からいろいろなニュース、研究などをお寄せいただくよう重ねてお願いしておきます。
○……世界選手権までいよいよあと6ヶ月を残すのみとなりました
選手強化対策委の活動もこのところいつそう激しい燃えあがりを見せているように感じます。
女子のオリンピック実施の声もチラホラ聞こえています。日本のハンドボール界が国際舞台で脚光を浴びる〝時〟は刻一刻迫ってくるのです。
ナショナルプレイヤーに充分な活躍をして貰うには国内体制の強化・確立が不可欠です。その礎に本誌がなり得たら……と編集子はつねに思っています。
○……65号でもお誘いしましたが我々とともにこの雑誌をつくろうという若い人材を求めています。
編集部まで御一報下されば幸いです。　（S）

JAGUAR

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第六十八号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可 昭和四十四年八月二十五日印刷 昭和四十四年九月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京[illegible]谷区神南町二五
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円（年間購読11回・千二百円）